# 昭和初期の岐阜師範附属小の綴方教授細目

## ――川口半平から岸　武雄へ――

高橋　弘

## 一

昭和二年の「岐阜縣教育」八月号に、川口半平（岐阜縣師範學校訓導）が、「學習としての綴方教育《綴方は如何なる路を歩むべきか》」と題する論考を載せた。川口はその中で、綴方の系統的指導案の必要性を主張し、次のように述べている。

最近總ての研究が本質の深みへ切込んで行くやうになつた事は喜ばしい現象である。綴方教育に於ても創作論や藝術論が叫ばれ出してから、頓に活氣を呈して來たやうな觀がある。然し其反面には又、教育の理想から綴方を學習として妥當な方案を求めやうとする研究が忘れられて來た。系統案の冷骸を抱いて創作の本質を顧みない實際家の影も淋しさの極みだが、又兒童を離れた藝術論や創作の一般論を其まゝに兒童を導かうとする指導案不必要論者の意見にも少なからぬ不安を感ずる。混沌とした綴方界は今や深みへ掘下げられた新しい綴方教育の立場から、學習としての綴方教育の使命を全うし、兒童の表現を積極的に生かす、統整された實際指導の方案が生まれなければならぬ時機に際會してゐる。

世には創作の自由性を叫んで指導案を排斥する論者もあるやうであるが、總て如何なる學習の指導でも、兒童の自然に歩む後に追從してのみ行くべきものでないことは勿論だ。其科の本質に觸れ兒童に即した指導案は必ずあらねばならぬ筈のものであらうと思ふ。

殊に綴方の如く其教材さへも定かでなく兎角教授が前後統一を失つて、其時〳〵の氣紛れ主義に流れ易いものに於ては、兒童をして斯くあらしめたいと思ふ教師の念願より生れたる指導

上の系統的方案の必要が、最も多大であることは言ふを俟たぬ事ではないか。

今少し具体的に言ふなら、我々は實際教授に直面して尋常一年の綴方は如何に指導したらよいか、又二年は如何に、三年生には取材鑑賞文話を如何なる目標によつて行つたらよいかと言ふ實際な考へが浮びはしないだらうか。其豫案を程よく吟味統整したものが、即ち綴方の指導案ではあるまいか。

或人は言ふであらう。「苟くも綴方教師として壇上に起つ者が、我學校に對して正しい綴方指導の系統的方案を抱懐せない者があらうか、形として現れずと雖も滌喇とした方案は胸中にあつて、時宜に應じて生きた指導となつて現れるのだ、敢て指導細目様のものとして作成するの必要があらうか」と。

其熱心と自信には敬意を表するに吝なるものではないが、然し如何に綴方の熱愛者と雖も、時に指導者が偏したり、粗漏があつたり、迂遠の道を辿つたりするの失敗を免れ得ぬであらう。まして吾人のごとく、否普通人の如く、偏見や怠惰性や放任性が生活の間隙から時折覗く者に於ておやだ。更に各學年の連絡統一の上から、學年を縦につなぐ研究の上から、指導案の確立こそ、實に綴方を指導の偏執と矛盾と重複とから救つて一路正しき歩みへ進ましむる最善の方法ではあるまいか。指導細目こそ兒童の表現を拘束し、求めざるものを強要し、兒童の伸びるべき心を涸らすものであると言ふ、舊き時代の系統案の言葉の幻影に囚れて、新しく目覺めた人々の等しく要望する新指導案の確立を、何等の批判なく盲目的に拒否し罵倒する人は、やがて自己自身の如何に時代遅れであつたかと言ふことを自ら氣付く時が來るであらうと思ふ。

川口が附属小に着任する以前の大正十二年から、この綴方指導系統案についての論考を書いた昭和二年にかけて、岐阜県の綴方指導で特筆されることは、雑誌「赤い鳥」に掲載された子どもの綴方、自由詩作品数、選外として氏名が載せられた数が、全国的に見ても指折りの県に入っていたということである。大正十二年の「赤い鳥」五月号では掲載綴方作品七点のうち、岐阜県四点・三校。同六月号六点中三点・二校。大正十三年一月号では六点中三点・二校。同二月号五点中三点・三校。大正十四年二月号は六点中四点・三校を初めとして、厳しい選者として定評のあった鈴木三重吉の選に入った岐阜県の子どもの作品とその所属学校名が、ほとんど毎号のように掲載され続けたのである。

「赤い鳥」が創刊された初期の頃の綴方はともかく、三重吉の綴方に対する考え方――生活の中であったことを、見たまま、聞いたまま、ありのままに、素直に、自分のことばで書く――が浸透

し始め、作品選評欄で、一々の作品についてそのことばの使い方、目の付けどころ、表現の仕方など具体的で丁寧な指導が行われたことの結果として、「赤い鳥」に掲載される子どもたちの綴方はどれも、子どもの生活の情景、雰囲気が生き生きと描き出されていた。後年、『作文教育変遷史』をまとめた川口が、その中で「赤い鳥」に載った作品「およめさん」とそれに対する三重吉の選評を挙げて、

これほど児童が解放された気分で、のびのびと自分の生活を、自分のことばで思うままに綴った文が、これまでにあったであろうか。これほど揺るぎない自信をもって、児童の文を熱心に見、細密な批評を加えた指導者があったであろうか。……赤い鳥の綴方運動は、まさに革命的であったといっていいであろう。

と述べているが、この一文などは、「赤い鳥」綴方と同時代を教員として子どもの綴方指導に当たった川口の、偽らない「赤い鳥」綴方の受け止め方であったと見ることができる。

このように川口は、「赤い鳥」綴方の作品としてのすばらしさ、そこまでの作品を生み出させるに至った指導者としての三重吉の功績を評価しながら、なお、日々「子どもたち一人一人」に「学習」を「指導する教師」、という立場からの問題を感じていたのではないかと思われる。

大正期末から昭和の初頭にかけての「赤い鳥」掲載作文、選外佳作の総数から言って、全国でも指折りの県ではあったが、この間の入選作を出した学校を見れば、今渡小、本荘小がそのほとんど、あと大八小、高山女子小、福寄小それに長島小、方県小ぐらいである。また名前の上がった学校を見ると、ほとんどの場合が、その学校の一人の特定の訓導の指導によることが分かってくる。また掲載作品の子どもを見ると、その学級の特定の子の氏名が何回か出てくる。

鈴木三重吉は綴方の指導について、「赤い鳥」復刊第一号（昭和六年）で、教師に次のように注意を促している。

……綴方の指導については、私が毎號實作をかゝげて鑑賞批評をする、この選評が何よりもの御参考になるのですから御注意下さい。つまりこれによつて、綴方の實質といふものは、どんなものであるべきかが具體的に分り、めい〳〵の兒童の作をどこまで導き上げて來なければならないのかの標準もつくわけです。言葉をかへていふと、私の鑑賞を味覺することによつて綴方の批判力がぐん〳〵養成されるのです。作品としてどういふところが缺点となるのかといふことが、製作的に、しぜんと飲みこめて來ます。この修得そのものが、指導の實力となるのは言ふまでもない話です。つぎには兒童の綴方を引上げていく手段としても、みんなの製作を、私の鑑賞のとほりに味つて、作の部分と全體との價値を飲みこませること、同時に一面には、

必ずすぐれた入選作をよまし、それを私の鑑賞のとほりに嘗め味はせること、この二つによつて、しぜんと、兒童の觀察を導き、感覺を鋭くするより外には事實何等の方策もないのです。

三重吉のこの考え方に従えば、綴方系統案の計画による綴方指導はもっての外、ということになる。事実、三重吉は綴方系統案の無用論を主張し、教員の中にもこれに同調するものが出てきていた。しかし、三重吉が、このような指導をし、綴方のよい成績を得るためには、「一に指導者の、行きとゞいた鑑賞力（つまり批判力）によって上下することになる」という警告をすべての教員が受け止め、すべての教員が「行きとゞいた鑑賞力」を身に付けて綴方指導に当たることは、到底出來ないことであった。川口が「岐阜県教育」誌で指摘している状況は、まさにこのへんの事を述べているのだ、ということが分かる。さらにまた、特定の教師による特定の子どもだけの優れた綴方に偏りがちな「赤い鳥」綴方の指導に対して、一人一人の子どもの「学習」の観点から、綴方指導細目の必要性を川口が提起していることも分かる。

川口が、かなり強い調子で岐阜県下の綴方指導の現状と問題点について言及し、綴方指導細目の必要性とその作成について問題提起をしているのは、岐阜県教育の指導的立場に立つ師範学校附属小の訓導、としての使命観もあったであろうが、それよりも、この論考を書く時までに、川口自身が『綴方指導細目』を発刊していたという実績の裏打ちがあったからに外ならない。

この『綴方指導細目』は、現在のところ残念ながら手にすることはできなない。ただ、「岐阜縣教育」誌の記者が、川口の書いた「学習としての綴方教育」の後に、「紹介」として次のように付言している。

「綴方指導細目」は、尋常科の六ケ年に亙るもので、各目に就て指導要項、参考文題、参考文例を掲げたるゝ實際教育家綴方の教授の良参考書である。（四六版一三七頁郁文堂支店發行定價八十錢）（記者）

ここに紹介された本の体裁、頁数、そして何より「岐阜縣教育」に載った「学習としての綴方教育」の内容、表現等から考え、次の項で考察を加える川口の著『生活共感　綴方指導の新路』の「第七章　系統案について」の部分が『綴方指導細目』の内容に近いものだったのではないかと今のところは推測するしかない。

## 二

昭和五年六月、川口半平は『生活共感　綴方指導の新路』（以下『綴方指導の新路』と略す）を東京の宝文館から出版した。この時

川口三十三歳。四六版三百六ページの『綴方指導の新路』は、川口にとって、中央から出版した最初の著作であった。

この書の内容は、三つの部分から成り立っている。一つは、綴方教育の現状、新時代の綴方教育の方向など、その時点における川口の綴方教育についての基本的な考え方を述べた部分。二つ目は、実際の綴方指導の場におけるさまざまな問題、例えば綴方の評点と評語、綴る前の指導、推敲の指導、綴方の処理等々とその解決のための具体的方途について述べた部分。三つ目が綴方指導の系統案についてその基本的な考え方と、尋常科一年から高等科二年に至る月毎の綴方系統案（題材、時間数、指導要項、参考文例等）を述べた部分である。この中、三つ目の系統案についての部分が百八十三ページと、全体の六〇％を占めている。

ちょうど前年の昭和四年十二月末、「綴方生活」の主催による新綴方研究講習大会が東京で開催され、川口は女子師範附属小の横山晋、今井誉次郎と共に上京した。川口はそこで意見発表も行い、地方から集まった元気な新人との交流もあって、「綴方が新しい方向へ進む機運を」十分に感じ取って岐阜へ帰ってきた。川口はその時のことを、「東京から帰った私は、確かに精神に新しい息ぶきを感じていた。私は何かやらなくてはおれないような気になって書き出したのが、『生活共感　綴方指導の新路』という書名で出版した綴方に関する原稿であった。」と、『花ぐるみ』の中で回想しているが、出版までの日数から考えて、川口が「学習としての綴方教育」『綴方指導細目』など、これまで書いたものの内容を整理し、新しい部分を付加し、一気に書き上げていったことが分かってくる。

『綴方指導の新路』の中で、川口は、綴方指導における系統案の意味、必要性について、引き締まった的確な文章で述べているが、そこでの強調点や内容の大筋は、「岐阜縣教育」に載せた「学習としての綴方教育」とほとんど同じと見ることができる。ここでは、これからの時代に求められる新しい綴方系統案を、どのような観点に立って作成するのがいいか、川口の考える四つの観点について見てみたい。

一、立場を兒童の文創作意識の發達過程に求めねばならぬ。

寫生主義に立脚した系統案が行き詰りの憂目を見たのは、其の教材排列が論理的には整然としたものであったが、兒童の創作意識の發達を顧慮しなかった結果、指導の標準と資料とが獨斷に陷って、徒らに實際家を拘束し、兒童の表現を不自然にしたからであった。兒童を置き忘れて、兒童を伸ばす具體案は出て來るものではない。新しい系統案は當然兒童其のものから出發して、兒童が如何に生活し、如何に物を眺め、如何に表現し、如何に伸びて行くかを凝視する處から生れね

ばならぬ。

二、教材は課題、自由作の二方面から取つて案排すべきである。

課題は指導教材として（1）一定の目的を與へて將來及過去の生活を深く生活させる爲（2）綴る能力を多方面に啓培することによつて生活を全的に表現するに到らしめる爲に必要であり、自由作は全く自由な立場から生命の欲求による文を綴らせる爲に大切である。

三、鑑賞と文話を織込むこと。

よき作品を味つて其の中に流れる生命を感得し、或は表現の法を會得する事や、文章觀を正しく導き育て、綴方の向上を圖る事が大切である事は言ふを俟たない。これ等は時宜に應じて取扱はれ、常に兒童の綴る力を觸發すべきであるが、それと共に系統案の上に於ても各學年に於て緊要な文話と鑑賞とを配當して其の統整を保つことが必要である。

四、自由の気分に満ちてゐること。

新しい系統案を通じて其處から生れるものは、泉石の美ではなくて、野の雲の下に自然に生ひ育つた若草の匂を放つものでありたい。これまでの系統案は動きの取れない程固苦しいものであつた。獨斷による密案にからまれて兒童も指導者も足(ママ)も出なかつた。從つて兒童と教師を虐げる恐るべき極權と呪はれ出したのである。本質に目覺め、自由の流れを受けた指導系統案は、兒童と教師とを共に生かし、喜びと感謝とを以て迎へらるべきものでなければならぬ。

この觀点から川口が編成した尋常科第一学年から高等科第二学年までの綴方系統案は、まず、各学年における「取材」、「構想と表現」、「文話と鑑賞」の三項目について、その指導の概要を掲げている。その一例として尋常科第二学年の場合を見ると、次のようである。

**尋常科第二學年**

**取材**

一、經驗をなるべく細かいところまで想ひ出させる。
二、自分の周圍をよく眺めさせて生活の文題化をはかる。
三、多方面に取材の暗示を與へて生活を文題化する指導を行ふ。
四、童詩にも取材態度を向ける。

**構想と表現**

一、經驗の順序通りに記述させる。
二、平假名を主として書かせ、其の使用に慣れさせる。
三、どんな事を書かうかと云ふことを大體決めて書くやうにする。なるべく思ふまゝに綴らせて想と筆を自由に伸ばさせる。
四、落付いて綴る習慣を養ふ。

五、記述後に自分の作品をしつかり讀みかへすやうにする。

1. すら〳〵と讀めるか。
2. わけの分らんところはないか。
3. 假名の混用や誤字、脱字はないか。
4. 句讀點はしつかりうつてあるか。

**文話と鑑賞**

一、兒童の氣のつかない方面に題材のあることを暗示する。

二、多くの題材の中からよい題材を選び出して綴ると云ふ心境の萌芽を養ふ。

三、描寫の初歩指導を加味する。適當な参考文によつて、讀んで目に見えるやうに書くのが上手なのだと云ふことを知らせる。

四、よき童詩を鑑賞することによつてその境地をさとらせ、うたごころを培養する。

五、漸次鑑賞と批判の眼を養ひ、初歩の文章觀を得させる。

現在の学習指導要領の指導事項を思わせる内容が尋一から高二まで示された後、これら事項の達成に向けて、以下、各学年とも、月毎に教材名を挙げ、その教材毎の指導時間、参考文題、参考文例、指導要項についてを載せたものとなっている。

ここではその細目が、どのように書き表されているのか、第二学年のいくつかの教材の具体例を見てみたい。

**尋常科第二學年**

**四月**　（凡八時間）

**文題を用意する指導**　（凡二時間）

指導要項

一、多方面に取材の暗示を與へて、生活を自由に文題化する指導を行ふ。

二、文題を多く求めてノートに記入させ、文題集を作らせる。

三、綴方の題はいくらでもあるものだ。生活はすべて文題である、と言ふ心持を總ての兒童にもたせるやうにする。

**自由作**　（凡二時間）

指導要項

一、前に蒐集した文題の中から、特によい文題を自選して綴らせる。

二、多くの文題の中からよい文題を選ぶといふ心境を養ふやうにしたい。

**推敲指導**　（凡二時間）

誤字脱字の批正を主とするもの

指導要項

一、批正文を與へて誤字（主として助詞）脱字（主として促

音、長音）を發見させる。

二、適當に切れてゐない文、即ち讀點のみで續けられてゐる文についても同様の指導を行ひたい。

三、批正文は主として何れの方面を批正するかを豫案して、適當なものを與へる。

四、前時間と聯絡をとり自作文を反省させて、自己推敲の態度を養ふやうにする。

五月　（凡八時間）

**ことがらを敍べる文**　（凡三時間）

自己の行動を主とした記述

参考文題　エンソク

参考文例

エンソク

ボクハコノアヒダ、ウメバヤシヘ、エンソクニイキマシタ。ボクハベンタウヲ入レタカバンヲカケテ、アタラシイウンドウグツヲ、ハイテイキマシタ。フミキリノトコロカラ、東ヘマガツテ、ズンズンイキマシタ。トチユウデ、クルマヲヒイタウマニ、ナンベンカアヒマシタ。ソシテヤツトウメバヤシヘツキマシタ。

ワカレヲシテカラ、ボクハ大キナミカンヲムカウトシタガ、カタクテムケレマセン。ソレデ、ワタナベセンセイニムイテモラヒマシタ。ソレカラタベヨウトスルト、ミンナガクツクツワラヒマシタノデ、ボクハポケツトノ中ヘカクシマシタ。ソシテミンナノヲラナイトコロデタベマシタ。ソノウチニアツマレノフエガナツタノデ、イツテミマスト、センセイガゴハンヲタベテモヨロシイトイヒナサイマシタ。スルトミンナガ大ヘンヨロコビマシタ。ボクハ石川クント吉田クント三人デ岩ノ上ヘアガツテ、オベンタウヲタベマシタ。石川クンガ

「キミ、ナニモツテキタ。」トノゾイタノデ「ミルナミルナ、イヤシンボダナ。」トボクガカクシマシタ。ボクノオベンタウハ、オスシデシタ。石川クンモオスシデシタ。石川クンハオスシヲ下ヘオトシテ「ア、オシイコトシタ。」トイツタノデ、ボクラハワラヒマシタ。オベンタウヲタベテカラ、ミンナトアソビマシタ。ウメバヤシハウメノ木バカリデ、スナバモブランコモアリマセンカラツマリマセンデシタ。ソレデボクラハ山ノ方デアソビマシタ。ソシテメヅラシイクサヲタクサントリマシタ。

ソノウチニ又フエガナツタノデアツマリマスト、センセイガモウカヘルトイヒナサイマシタ。ボクラハナランデ、モトキタミチヲカヘリマシタ。ミンナガウタヲウタヒマシタガ、ボクハクタビレテウタガデマセンデシタ。フミキリノトコロデセンセイニサヤウナラヲシテ、ウチヘカヘツタノハ三ジ半ゴロデシタ。

指導要項

一、經驗を順序に記述するやうに指導する。

二、經驗を十分思ひ出させて、出來るだけ細かく記述させる。

**對話文の指導**　（凡三時間）

参考文題　センセイト……サンノハナシ。

私ト……サンノハナシ。

参考文例

ボクト石グレクンノハナシ

「石グレクン、イイモノ見セテアゲヨカ。」

「ナニヲ。」

「アテテミタマヘ。」

「ワカツタ。ヱ本ダラウ。」

「ズルイナ、見タンダラウ。」

「デモ、見エタカラシカタガナイ。」

「デハ見セテアゲヨウ。ソラ、コドモノクニダ。」

「キレイナヘウシダナ。」

「中ノ方ニモツトキレイナヱガアルヨ。」

「見テシマツタノカイ。」

「ヱハダイブン見タ。デモマダヨンデハナイ。」

「ヨンデシマツタラ、カシテネ。」

「アア、カシテアゲルヨ。」

指導要項

一、讀本の文章を例にとつて對話體の形式を吟味する。

話す通りの順序に書くこと

「カギ」をつけて言葉はそれ〴〵別の行から書き始めること。但しことばは生々とした子供の會話そのまゝに據つて、生氣のない讀本調を模することを避けたい。

二、地の文の入つてゐない對話文を記述させる。

（中略）

**十月**　（凡七時間）

**ことがらを敍べる文**　（凡三時間）

自己の行動を主とした記述

参考文題　うんどうくわい。

参考文例

うんどうくわい

おとついはぼくらの學校のうんどうくわいでした。そしてぼくは五十米で二とうをとりました。ぼくらのはしつたのは二ばん目のくみでした。白いすじのところへならぶと、さかもとせんせいが、よういといひなさいました。するとまだてつぱうのならないうちに、みんながはしり出したので、けうせいのせんせいが、大

きなこゑで、「まだまだ。」といひなさいました。そこでぼくらは又もとのところへもどりました。そのうちバンとてつぽうがなりましたので、ぼくは一しよけんめいにはしりました。けつしようてんへはいると、そこに見えたせんせいが、ぼくをとらへて、二とうのはたをくれました。一とうは大のくんでした。ぼくは二とうのはたをもらつてかへらうとすると、せんせいが「あちらへ行つてふだとかへてもらひなさい。」といひなさひました。ぼくははたをもつて行つてふだとかへてもらひました。そしてふだをおとらかさないように、しつかりズボンのかくしへ入れました。じぶんのばへかへつてくると、大のくんが「きみは二とうだつたか。」といひました。「うん二とうだつた。きみは一とうだつたな。」とぼくがいひました。それからみんなと一しよにうんどうくわいを見てゐました。

指導要項

一、材料の取捨、着眼の仕方等に暗示を與へる。

二、單なる記録の文でなく、自分の最も忘れ難い場面を想ひ起して綴るやうにしたい。

（中略）

十二月　（凡六時間）

**ありのまゝを寫す**　（凡三時間）

人物の觀察的記述

参考文題　私のともだち。おうちの人。おとなりの人。

参考文例

おとなりの人

おとなりのふるどうぐやのをぢさんが、今日も店先でたばこをすつてゐます。をぢさんのきせろは、ほかの人の三ばいぐらゐ長いのです。その長いきせろを口にくわへてすふときは、りやう方のほつぺたが、へつこみます。そしてきせろを口からはなしてしばらくすると、ふ——んとけむりのぼうが、はなのあなから出てきます。をぢさんはあたまがつる〳〵にはげて、毛はうしろの方にしかありません。をぢさんがたばこをすひつけようとして、うつむくたびに、そのはげたあたまが大へんよくわかります。ぼくはヤカンあたまといふことをおもひ出して、ほんとによくにてゐるなあとをかしくなつて、クツ〳〵わらひました。それでもをぢさんはしらずに、長いきせろですぱり〳〵とたばこをのんでゐます。そんなにうまいのかしらん。大人つて、へんなもんだなあと、ぼくはおもひました。

指導要項

一、日常生活の圏内にあつて比較的親しみを感じてゐる人、又は觀察するに都合のよい人から取材させ、活々としたも

のを綴らせるやうにしたい。

二、その人らしい個性を見出させるやうにしたい。

**鑑賞と文話**　（凡一時間）

年賀状の指導を主とする。

参考文例

（一）

しんねんおめでたうございます。

ぼくも八つになりました。ことしはうんとべんきやうするつもりです。

（二）

しんねんおめでたう。

ことしはうまの年だからげんきでべんきやうするつもりです。

文一くんばんざい〳〵

指導要項

一、年賀状のことばは従來の形式的な文辭を暗誦的に授ける如きことなく、兒童の率直なることばに據らしめたい。

二、はがきの認め方を指導する。

**一月**　（凡六時間）

**ことがらを敍べる文**　（凡三時間）

自己の行爲を主とした記述

参考文題　おもしろかつたお正月。お正月にあそんだこと。

参考文例

元日にあそんだこと

元日の朝、式をすましてうちへかへつて來ると、せきやくんと矢のうくんがあそびに來ました。そしてみんなでかるたをとりました。兄さんがよみ手になりました。「あしびきのやまどりのをのしだりをの」「はい」とよし子ねえさんがとりました。せきやくんはよむたびにりやう手で前をおさへました。ぼくは「ちはやふる」といふのをしつてゐるので、早く出ればよいがと、まつてゐましたが、どうやらしてゐるうちに、よし子ねえさんにとられてしまひました。ぼくらはとうとうむちやをしたので、外へおひ出されてしまひました。

そこで大野くんをさそひに行くと、大野くんはぎふへ行つてるすでした。それからいとうくんのところへ行く道で、一年生の女の子たちがはねをやねにかけてさわいでゐました。ぼくらはとつてやるといつて、きんじよから長いさをかりて來て、やねをたたいてゐたら、そのうちの人にしかられました。ぼくらは「いらんことしてしかられたげ。」といひながら、いとうくんのうちへ來ると、いとうくんが見えたので、そこでいろいろなことをしてあそびました。

指導要項

一、取材の範圍を示すだけにとゞめて、後は自由に綴らせる。

二、何をどういふ順に書かうかと考へてから筆をとるやうにする。

## 三

川口半平は、『綴方指導の新路』に引き続いて、昭和八年一月、東京・厚生閣から『生活開発の綴方教育』を出版した。四六版三八四頁、川口はその「小序」で、まず「綴方はどこまでも兒童の生活に根を下すべきであると私は思つてゐる。たゞ其の生活を如何に眺め、如何に開拓すべきかが大切な問題なのだ。」と、自己の拠って立つ基盤を確認し、生活を母胎とする綴方・新興文学と綴方教育・記述より處理まで・綴方としての童謡と童話などの章立てで、自己の綴方指導の考え方、実際の指導法などについて述べている。その中の一つに、「各學年の綴方指導」の章があり、尋一から高等科までの綴方指導の見通し、指導の中心となる事項、それに関連した綴方作品例が載せられている。

川口の前書『綴方指導の新路』と比較して本書の特徴的なことは、各学年とも、最初に、綴方指導面から見たその学年の特色を、小見出しを付け、概括して述べていることである。綴方の始期（尋一）、取材の擴充（尋二）、ほがらかに伸びる（尋三）、ひろさより深さへ（尋四）、展開期（尋五）、無限成長（尋六）等である。一例として、前書との対比において「尋二の綴方」を見てみたい。

### 二　尋二の綴方

#### 一　取材の擴充

この頃の兒童に形式の整美を求めようとすると、優等生は味も潤ひもない只形だけの、自分を見失つたやうな文を作るやうになり、劣等生は恐る〳〵三四行綴つて教師の顔色をうかがふと言ふ風になり易い。殊に片假名から平假名へ移る頃は、形式方面の不慣れからも一時停滞を見せる傾向さへある。綴方の意義をおぼろに覺り得たとは言へ、未だ生活を自由に文材化するまでには、耕すべき多くの部面を残して居る。指導の中心をあやまつてはならない時である。

しかし此の學年は決して指導者をして指導に悩ませる時代ではない。寧ろ兒童は綴方に興味を持つて、内容も豊かになり、綴る力もずん〳〵伸びる時代である。此の頃に於て兒童をして綴方に對し、興味索然たらしむるものがあつたら、兒童の綴方をあらぬ方へへし曲げようとした指導錯誤の結果と見るよりほかはない。

此の學年に於ける大切な指導は、取材の擴充と言ふ點である。或る素材を如何に活かすかなどと言ふことは問題の中心を爲さない。素材即文の時代である。生活の中に綴るべき材料をいくらでも見出すこと、書くべき素材をいっぱいに持ってゐることこそ望ましい狀態なのである。題材の貧しさに惱むやうな兒童では、如何に小器用な文を書いたところで駄目である。一つの文題を後生大事に守って、それを書いてしまったら、もう書くことがなくなったと言ふやうなことでは、生活の綴方化も何もあったものでない。指導者は何處までも多方面に取材の暗示を與へて生活を自由に文題化することに力を注がなければならぬ。それには文題帳を持たせることなども面白い方法であらう。

以下、「経験の細叙」「育ちゆくこゝろ」「ありのまゝを寫す文」「推敲」等、特に二年生段階の綴方に現れてくる傾向、又は発達段階から見て指導するのが望ましい内容について項目を設け、そのことの説明に適切な綴方を例に挙げながら、

自己の行動の叙述からかうした寫生的なものへの題材の展開は、日常生活の圏内にあるすべてのものへ觀察の眼を向けてやる上にも大切なことである。「思ひ出して書く文」ばかりでなく、「眺めたまゝを書く文」についての指導を此の學年頃から始めていゝと思ふ。

というような解説を加えている。

各学年の項の最後に付けてある例えば「尋二の綴方指導要項」の内容は、どの学年とも、前書『綴方指導の新路』で提示されたものと同じである。

## 四

昭和十一年二月、『新綴方系統案』（岐阜縣師範學校附屬小學校著）が、岐阜・大衆書房から刊行された。四六版、二三八ページのこの書の冒頭に、附属小学校主事江崎英一が、発刊の経緯について述べているが、その中に、「……老練川口訓導去って新進岸訓導よくこの跡を繼ぎ、附屬小學校の綴方教育に新味を盛り、やがて縣下の斯界に清新の氣を吹込まんとする意氣に燃えてゐます。今第二十五回縣下訓導國語科協議會の開催されるを機會に、その研究の一端をまとめて此の小册子としました。……研究主任岸武雄訓導その他の今日の足跡を、記念する一里塚とはならうと思ひ、……」というくだりがある。

ここに書かれているように、川口半平は昭和十年四月に揖斐郡小島小学校長となって附属小から転出し、それまで読方領域を主に担当していた岸武雄が、川口の後を受けて、附属小学校の綴方主任に

なっていたのである。

『新綴方系統案』をまとめた頃の岸武雄は、二十二歳、文字通りの「新進」であった。岸は、昭和七年三月岐阜師範卒。本巣・舟木小勤務一年で、翌昭和八年から岐阜師範附属小勤務となった。川口と同じ国語部に所属したが、研究面では川口が綴方を担当していたので、岸は読方を主に担当することになった。附属小へ着任したその年、岸の「所謂『文意把握』の實践的研究」が「岐阜縣教育」十一月号に載った。この論考に端を発し、土岐・日吉小の内野三男の「岸君の所説を讀みて」（昭和九年・一月号）、岸の「内野君に答ふ」（同・二月号）、岐阜・本荘小の安池重寿の「文意把握を主とせる試論」（同・三月号）、内野の「岸君に語る附安池君に一言」（同・五月号）と論争が続いたところで、一応のピリオドが打たれた。この論争は、「岐阜縣教育」誌の、岐阜県教育の活性化という意図もあったであろうが、それにしても、若い岸が先輩と読方指導について渡り合った気力、実力は県下教育現場の注目するところとなった。

なお、この昭和九年三月には、岐阜師範学校がこれまでの加納から長良に移転するのに伴い、附属小も長良へ移ることになった。これを契機に作られた附属小研究誌「各教科の新研究」に、川口は『新綴方系統案』につながる「綴方取材系統私案」を、岸は「高等科讀方指導の方法的研究」を載せており、また、岸はこの年に「教育学」で文検（文部省検定）をパスするなど、各面に若さ溢れる精力的な活動ぶりを見せている。

時期としては少し後になるが、転出した川口の後を受けて綴方主任となって一年、『新綴方系統案』を刊行して一区切りがついた昭和十一年四月、「綴方岐阜人」の会が発足し、その活動が始まった。第一回「岐阜人」研究発表座談会（昭11・12実施）で、岸は「私の綴方指導」の発表を行い、その時の鷲見臣一郎の記録が「綴方岐阜人」（第二号）に載っている。

附属の岸は、校正刷を持って、今印刷中の全校文集について話す。全篇百數十の作品に、獨りで良心的な評を書き下したと言ふから、それ丈で、一見弱さうな彼の偉大な精力に感心してしまふ。長いのになると、一篇に對して、原稿用紙の一枚半も批評を書き、主として指導者相手の指導を書くと言ふから、益々だ。文例を擧げては、自分の評を讀み、意見を吐く。確かなものだ。彼は、綴方に對して、本質的な歩みを希求してゐる。人生科とか生活科とかの名に置きかへられても一向差支へない様な、廣いと言へば廣い、曖昧だと言へば極めて曖昧な存在としての綴方に慊らない。彼はもつと、他の藝術教科群の様に、多分に技術的な方向を重視した綴方教育を叫んで止まない。生活々々と言ひ、生活々々と書いてゐて、その實何か生活から遊

離してゐる様な綴方も相當に多い今日、岸の主張は傾聴に價する。

と、記録者の先輩同人を感心させた、きめ細かな指導実践への精力的な取り組み、また、「岐阜人」（第三号）に載せた岸の論考について、これも先輩同人安池重寿に、編集後記の中で、

岸が近頃諸雑誌に書く原稿にしても、又本號の『綴方に於ける基礎練習』にしても、實践から叩き出した思索を發表してゐる態度は全くいゝ。彼が去年中六年生の女兒を持ちながら、たくましい實践を持續していく精力には感心せざるを得ぬ。この一文から彼の實践のたくましさを讀み出してほしい。

と賛辞を贈らせた、実践から思索への継続的な歩みなど、若い岸への期待の大きさが分かってくる。

『新綴方系統案』をまとめ、発刊することは、綴方主任となった岸の、最初の仕事となった。岸はどのような考え方でこれをまとめようとしたのか、この本の「小序」に「編者識」として書かれているもので見てみたい。

綴方教育は華やかである。他教科には見られない若々しい熱情と深い思想性を持ってひたすら實踐の一路に突き進んでゐる。併しながらこの華やかな外觀の反面には、絶えずある不安が潜んでゐるやうに思はれる。その不安の原因は結局、次の二つに歸する。その一つは綴方に於ける指導の原理が思潮的なものによって規制され、指導の目標が常に浮動し勝ちな不安を與へてゐることである。これは一面綴方教育に生新味を加へるものであるが、生活の表現である綴方教育がその根本まで思潮的に左右されてゐるといふ事實は正しい姿とは言ひ難い。綴方教育はもっと兒童性を眞劍に見つめ、そこから根底あるものを築き上げねばならない。更に他の一つの原因としては方法に於て余りにも自由性が多いといふことである。もとより綴方教育は他教科に比してより多分に自由を必要とするであらうが、その結果は往々にして教師の趣味、人生觀等によって着色され、偏向される虞がある。かく考へる時、綴方教育に於いてはもっと組織化といふことが全般的に取入れられてもよいと思はれるのである。

本書は以上の如き意圖の下に生れ出たものである。即ち出來るだけ兒童表現の伸展に即し、その指導方法もなるべく具體的組織的であるやう念願した。次には此の意図を更に具體的に述べて見たい。

一、兒童表現の伸展を基本原理とした。

如何に思潮的尖端を行くものであらうとも、兒童表現の本質より考へて妥當でないものは排した。〃新しいもの〃

といふよりむしろ〃正しきもの〃を念願したのである。

この選擇の基準は各學年の最初に付けた「指導の根本態度」に於て具體的に示したつもりである。

二、最新の動向をよく檢討の後取入れた。

最近十年間に於て綴方が開拓した分野は廣い。童詩、童話、觀察日記、科學的な文、實用的な文等それである。

本書は深き吟味の後、これ等のものも多分に取入れた。

三、實際指導に活用出來ることを圖つた。

指導題目を各月に配當すると共に、その要旨を明確に示し、更に具體的な指導要項を挿入した。尚、文例詩例も出來るだけ豊富に用意し、單に本校兒童作品のみならず、廣く全日本兒童の優秀作をも取入れた。

この「小序」本文中に、傍点が付されていることばは「兒童性」と「組織化」の二つである。綴方教育の現状から考え、綴方教育はもっと児童性を真剣に見つめそれを根底に据えること、指導方法等も教師個人の恣意的なものに任せるのでなくなるべく具体的・組織的なものにしていくこと、これを踏まえて一、二、三の具体的方針にまとめ、新しい綴方系統案を作成したと述べている。

ここに述べられた作成の意図、及び意図の具体化の観点は、『綴方指導の新路』、『生活開発の綴方教育』に見られた考え方、作成の方針等を整理し、明確にし、実践に活用される系統案の立場をより一層強調したものとなっている。

『新綴方系統案』（以下、『新系統案』と略す）の目次を見ると、各学年とも最初に、「指導の根本態度」・「指導の具体的方針」が述べられ、次いで四月から翌年三月までの各月ごとに、指導題目（指導時間数、要旨、要項、文例）が書かれている。例えば、『綴方指導の新路』、『生活開発の綴方教育』で示した尋常二年の場合の一部分を対比してみると次のようである。

## 尋二の綴方

### 1. 指導の根本態度

尋二の綴方を指導する根本態度はやはり、生活の開放であると思ふ。素直に、自由に、生活を開け放してやることが、綴方工作の第一陣であり、又、低學年綴方の目標も其處にあると思はれる。

而して尋二に於ける生活の開放は、次の二点に於てその特異性を有する。生活がすみ〴〵に至るまで開け放されて行くことが、その第一であり、開け放す手段技術に於て、彼等自身、相當の伸展を示すことがその第二である。

尋一に於ける素材の中核をなすものは遊びであり、行動が創作の契機であつた。尋二に於てもその根本に於ては又これと同じで

あるが、その行動性が次第に事實的色彩を帶びて來ることに氣付くのである。例へば單に遊んだことが中心的關心でなくて、「金魚と遊んだこと」に創作意慾の本源があるのである。この事實性はやがて中學年に至つて、華やかな實を結ぶのだ。この行動性と事實性とが適宜に調和された所に、尋二の文としての特異性を見るのである。教師は以上の如き文章觀の下に努めて取材の擴充、生活の文題化を指導しなければならない。

生活が擴充されると共に、その表現力が伸展するのも當然の傾向である。やはり自己の行動記述がその中心であるが、その綿密さ、溌剌さに於て遙に深まつて行くのである。又、次第に目立つて來る會話の活用も見脱し得ぬ傾向である。只この時代の特長として、表現はどこまでも生活と一体である。生活、素材を耕すことが、即表現の指導なのである。

## 2. 指導の具體的方針

### 【取材】

一、取材の態度

素直に生活を開け放す態度を培ふ。

經驗を細かに想ひ出す指導をする。

1. 常に文題を用意する指導を行ふ。
2. 多くの題材の中からよい題材を選んで表現させる。
3. 氣のつかない方面に題材のあることを暗示する。

二、取材の内容

多方面に取材の暗示を與へる。

日常の生活事實を中心として、人物、動植物等にも目を向けさせる。

童詩、手紙を指導する。

### 【表現】

一、構想

書かうとする事柄を大體思ひ浮べさせる。

經驗の順序に順つて記述させる。

二、記述

行動を綿密に表現させる。

描寫、説明の初歩的指導をする。

平假名の使用に慣れさせる。

基本的な假名遣は相當の程度に習慣化させる。

記述の形式、記號に慣れさせる。

句読点、括弧の付け方を指導する。

落着いて綴る習慣を養ふ。

三、推敲

記述後は自分の作品をしつかり讀みかへさせる。

1. すら〳〵と讀めるか。
2. わけの分らぬ所はないか。
3. 誤字、脱字、假名の混用はないか。
4. 句讀点、括弧はしつかりつけてあるか。

【鑑賞】

適當な文例を豐富に示して、表現を中心として指導する。

初歩的な文章觀を養ふ。

本當の通りに目に浮ぶやうに書けてゐる文がよいと指導する。

『生活開発の綴方教育』から引き継いだ、その学年の児童の特性、生活、意識がどうなのか、それを踏まえた上での表現指導の内容、技能はどうあったらよいかを総論的に述べた「指導の根本的態度」の項が最初に設けられた。次いで『綴方指導の新路』の「取材」「構想と表現」「文話と鑑賞」の観点が、『新系統案』では「指導の具体的方針」として「取材」「表現」「鑑賞」に整理され、それぞれの内容として掲げられていた事項を取捨選択して整理したり、新たに付加したりしている。また、「系統案を活用できる方向で」との意図は、月ごとの題材の指導についても言えることである。一例を挙げると次のようである。

文題の準備（四月）

要旨

文題を前から準備して置き、綴方の時間にはその中から選擇記述するやう指導する。かくて次第に生活の凝視、反省の態度を培ひ、意識的、計畫的な綴方生活をなさしめる。

要項

一、文題帳を各自に持たせたい。一例を示せば

| 月日 | 文だい | 書かうと思ふこと |
|---|---|---|
| | | |
| | | |

二、氣のついた度に文題を書き込んで置くやう指導する。

三、綴方の時間には、文題帳の文題に就いてよく語らせ、又自分で選擇させる。

遠足の記述（五月）

要旨

新しき經驗、未知の世界、學友との協同的行事等、遠足は彼等にとつて實に強烈な印象と歡びを與へる。遠足を中心としての自己の行動を綿密に記述させ、相當の長文を指導したい。

要項

一、最初の時間は遠足について種々の觀点から話し合ひを始め、記憶を呼び覺ましてやる。例へば、①遠足の前の日

②その日の朝　③お父さんやお母さん　④學校　⑤天候　⑥お友達　⑦途中で見たもの　⑧目的地　⑨面白かつたこと　⑩歸り　⑪家　等々

二、お話合ひの時にも、又、文に於ても、獨特の觀察、獨自の感想等個性的なものをよく推奬し、文の概念化を排するやう注意したい。

三、地圖や繪を入れさせるのも、面白いと思ふ。

実際の授業の時、授業者のヒントとなるような解説が、『綴方指導の新路』の場合と比べてより詳しく、具体的になっている。

では、『新綴方系統案』の指導細目がどのようになっているか、尋常四年生の場合で見てみたい。

## 尋四の綴方

### 1. 指導の根本態度

尋四綴方指導の根本態度は尋三の後をついで、やはり生活の開發である。生活をしみじみと自覚するといふより、むしろ對象に向つて放射状に伸展させる時代である。尋三の時代はかゝる傾向への出發期であつた。而して尋四はその圓熟期である。

外界への積極的態度としては、理科的指導と相待つて、相當科學的な眼を持ち始めるのが、その著しい特長である。動物、植物、氣象等の自然界は勿論、家庭社會等にもかゝる積極的な觀察眼を開かせて、この傾向を育くむことが大切である。

内界への伸展としては、個々的な感情の流露から、終には、豊かな且つ全面的な心情の動きにまで達するのである。「悲しかつたこと」「かはいさうに思つたこと」等の主題の下に、深まりゆく心情の動きが實に刻明に表現され始めるのである。

この一見相反するが如き二つの傾向も、實はかの主觀と客觀との對立から出發したものであることは、既述の通りである。そこには統一しようとする苦吟の姿は見えない。すべては自由に朗かに、のび〳〵と伸展するのである。會話、觀察、行動、感情等それ等は素直な表現により程よきニュアンスを織り出す。實に四年は綴方工作に於ける黄金時代である。すべての兒童が何の澁滯する所もなく、どし〳〵表現するのだ。生活の開放は二年に於て華を咲かせた如く、生活の開發は四年に於て、その實を美しく結ぶのである。この意味に於て生活の積極的な開發は本學年の最も中核的な指導原理となるのである。

### 2. 指導の具體的方針

【取材】

一、取材の態度

物事を觀察し考察する積極的な態度を培ふ。

經驗を反省して取材する態度を培ふ

生活の味を見出させる。

二、取材の内容

多方面に題材を取らせる。

1. 現實的な日常生活行動。

2. 内省的憧憬的なもの。

3. 説明的觀察的なもの。

童詩、童話、手紙、日記の指導。

【表現】

一、構想

豫め記述の順序を立てさせる。

自然的な統一のあるやう心の用意をはかる。

二、記述

刻明に、自然に、表現させる。

表現技法の初歩を指導する。

描寫と説明、精叙と略叙、常体と敬体

文字を丁寧に書く態度を培ふ。

三、推敲

自己推敲の態度を培ふ。

1. 書かうとしたことを、改めて想起して見る。

2. 想起した内容と文とを照合して見て不満足のところを訂正する。

3. よく書きあらはした点を發見する。

【鑑賞】

参考文を豊かに考へて、鑑賞批判の眼を培ふ。

文章觀の確立をはかる。

1. 心の眞實がよくあらはれてゐる文。

2. 科學的態度に立つ文。

## 四　月

### ▼文章觀の確立　（凡一時間）

要旨

心情の動きが素朴ながらに文面に現はれ始めるのがこの頃である。單なる外面的な事件の面白さのみでなく、しみ〴〵とした情感が底流をなす文の味である。よき文例によつてかゝる文章觀を植ゑつけたいと思ふ。

要項

一、何故、作者がこの文を書く氣になつたのか、その氣持をはつきりつかませて鑑賞の出發点とする。

二、作者が「雀の子」に抱く心持を、表現の上から拾ひ出させ、その僞らざる素直な表現をよく味はせる。

三、心情の文は稍もすると、饒舌になり、誇張に流れ易い。寡黙な行動の中に潜む作者の眞實性に觸れしめる。

すゞめの子　（愛媛県の子供の綴方　略）

▼自由作　（凡三時間）

▼童詩　（凡一時間）

要旨

無駄な言葉を省略し、詩を作品として洗練する指導を行ふ。詩的表現としての言葉の感覺を豊にし、ひいては詩のとらへ方に新しい視野を考へたい。

要項

一、「詩のノート」や「詩の發表板」などの現實の作品を素材として、推敲させた方が、實感もあり、効果的であらう。

二、この詩で一番大切な言葉はどれかといふことをはっきり意識させ、他の從屬的な言葉も吟味し、焦点を明にすることが大切である。

三、無駄な言葉の大半は、描寫的な語句より説明的な語句に多い。また、主格の語句、敬体、過去形等も詩の印象を薄弱にし易い。

四、詩の推敲は、理窟よりむしろ直感である。この直感を大切に育て上げることが大切だ。推敲前と推敲後の作品はよく讀ませて比較させる。

飛行機（推敲前）

私が畑で
草ひきをしとつたら
飛行機がぶーんと
うなつてきた
私はあはてゝ草ひきをやめて
上を向くと
青い空だつた
飛行機のつばさが
ピカツと光つた

飛行機（推敲後）

畑で草引きしてゐた
ぶーんと
飛行機がうなつてきた
あはてゝ上を向くと
青い空
飛行機のつばさが
ピカツと光つた

五　月

▼春の草花調べ　（凡四時間）

要旨

理科生活が彼等の前に拓かれてから、彼等の關心は非常な熱意を持つて、虫に、魚に、草花に働き始める。春の草花を意識的に調べさせ、表現させる事によつて、今まで見慣れてゐた世界に新しい意味を見出すやうに指導したい。

要項

一、理科と連絡をとり、をしべ、めしべ、はなびら、がく、

葉、莖等までよく調べさせ、又わかり易く表現させる。

二、「植物辭典」などを備へつけておいて、自分で積極的に研究させる。

三、繪も入れさせる。

四、子供はともすると自分の行動を書く、所謂、叙事形態に變化し易い。説明形態に充分練熟せしめたい。

五、文表現としては次のやうな事項を含むとよいと思ふ。

（イ）説明―例　をしべは五ミリ位。皆つゝのやうにかたまつてゐる。

（ロ）感じ―例　今にもをどり出しさうな面白い花。

（ハ）聯想―例　私のうちにも澤山咲いてゐる花。

春の草花

一、なづな　（繪省略）

これをおばばのしやみせんと私たちは言ひます。それは葉のえがちようどしやみせんのやうな形だからです。ほんたうはぺん〳〵とかなづなとかいふのださうです。花は小さくて白く、かはいゝです。道にいくらでもはえてゐます。

二、よめな　（絵省略）

葉ばかりの草です。けれども名前がいゝし唱歌にも出て來るのでしらべました。先生が「これは秋になると野ぎくとなつて花がさくのだ。」とおつしやつたので、おもしろいなあと思ひました。葉の形はまるくて長く、ふちはのこぎりのはのやうになつてゐます。

三、たんぽぽ　（絵省略）

たんぽぽはもうすぐ理科でしらべます。葉はぎざ〳〵でいたいです。花はびらつとひらいて、道ばたにきれいにさいてゐます。花は小さい花がより集まつてゐるのださうです。くきをぽきんとをると、中はからです。もうすぐに花がほけて、白い毛ばかりになります。ぷつとふくと、からかさのやうにふわ〳〵とんで行くのです。

四、すゞめのひえ　（絵省略）

すゞめのひえといふ名前はをかしいです。小さいからすずめといふのかもしれません。これを私たちがふきますとピーときれいなこゑでなります。私の一ばんすきな草です。

五、をどりこさう　（絵省略）

見てゐると、ほんとにをどりさうな花です。葉がでてゐるところに、むらさき色のかはいゝ花をつけてゐます。花をよく見るとをかしい形です。春ちやんが「そら〳〵をどるよ。」といつて、手にもつてふつたので皆がわらひました。

六、はこべ　（絵省略）

この草は私のうちのみぞに一ぱいはえてゐます。花は白くて、五まい花びらがありますが、とても小さいです。この草が一ぱいはえてゐるときれいです。いつ見てもりん〳〵で青々してゐて、ほんとに元氣な草です。

▼**觀察日記**　（凡三時間）

要旨

動物、植物、氣象等を繼續的に觀察記録させ、その日記を指導する。相當科學的な觀方及表現技法を要求したい。

要項

一、三年二學期の觀察日記の發展と見てよく連絡をとると同時に、四年の理科とも亦、横の關係を考へたい。

二、單なる印象的な觀方及表現でなく、繪畫、數量を用ひ相當科學的でありたい。

三、併し、只調べるがための調べは意味をなさない。子供の意慾關心が充分働いてゐる日記でありたい。

四、参考題材

かへるの發生及成長。菜の花の開花及結實。雲と天候

おたまじやくし日記

五月十九日

おたまじやくしに小さい足がはえました。ほんのちよつとしたものです。尾のもとの方から二本、兩がはへ出てゐるのです。

水そうの中のほてい草の下へ、おたまじやくしはすゞめのすのやうにかたまつてゐます。時々小さな口をあけてうき上つて来ては又いそいで下つて行きます。おたまじやくしは尾の下に、まるい長いうんこをつけてゐます。

五月二十日

おたまじやくしをはかることにしました。大野さんがきやっ〳〵とわらいながらおたまじやくしをつかんでつくえの上にのせなさいました。川島さんが「わたいがはかる。」と言つて、ものさしをあてたのでみんながわらいました。おたまじやくしはおとなしくしてゐました。五センチメートルと二ミリでした。

五月二十二日

今日ひどいことを見ました。それは死んでまつ白なお腹を上にしてゐたおたまじやくしを、みんなかゝつてつゝいてゐるのです。私はなんといふひどいことだと思ひ腹がたちました。私は腹がへつてゐるのかと思つてかつををけづつたのをやりましたが、あまり食べません。

五月二十五日

二日見る事を休んでゐる中に、小さい黒いおたまじやくしに、前足もはえました。二センチくらいの小さいおたまじやくしで

す。大きいのはまだ後足だけです。小さいおたまじやくしは尾をつけたまゝ、おかしいかつかうでおよいでゐます。

七　月

▼推敲　（凡一時間）

要旨

形式上の推敲のみでなく、書かうと思つてゐた事が正しく表現されているかどうかといふ内容的推敲を指導したい。

要項

一、學級全部の者が經驗したことを、誰かゞ綴つた文が推敲の對象として一番適切である。皆が其の時の様子、氣持などを想起しつゝ共同推敲し得るから。

二、推敲の着眼は次の諸点にする。

イ．時間の關係の矛盾。

ロ．内容上の重複、無駄。

ハ．文を連絡させ、主語を省略する所から來る矛盾。

ニ．書き足らなくて、その氣持や様子の浮ばない所。

三、假名遣、句讀点、括弧等も副次的に注意させる。

▼手紙　（凡一時間）

要旨

眞情の籠る手紙文を鑑賞させ、正しい手紙觀を養ふ。

要項

一、相手に對するまことの心持が手紙文の根本であることを理會させる。

お手紙

兄さんはおじようぶですか。私はじようぶです。うちの方はだいぶあつくなりました。滿州はたいへんあついでせう。四郎兄さんは、十六日頭が病めるといつて、ねてばかりゐました。十六日には、ねえさんも來て見えます。

十六日は川まつりでしたので、お父さんたちは「今日はあんきな。」といつてみえます。けれども、時々「滿州の事をおもや、こんなことぐらいどうてこたない。」と言ひなさいます。私もそういはれるたびに「あゝ、兄さんはえらいなあ。」と思ひます。

私はもうすぐ夏休みなので、一ばん夏休みがまちどほしいです。夏休みは川があびれるけれども、兄さんたちは、あびれないでせう。「今ごろ、兄さんがうちにをれば一番うれしい。あの前の川であびれるのに。」と思ひます。

この間の七月三日ごろに、くすりやの安藤さんのお父さんが死になさつたので、安藤さんはしけんをすませてかへりなさつた。安藤さんはいつも、せんがなさそうに學校へ行きなさるさうです。お父さんが今まで、たいせつにそだてたすいかやかぼちやは、

このあいだの雨でおちてしまひました。お父さんはいつも「まあすいかや、かぼちやは、今年たべれん。」と言ひなさると私は、「いいは、買つてきてたべや。」と言ひます。お母さんはいつもかいこがでたので、せはしさうにしてゐなさいます。

私は兄さんのかへつてくる日が一番まちどをしいのです。じようぶでかへつてきてください。　さようなら

七月十日　大野とき

満州の兄さんへ

▼**自由作**　（凡二時間）

▼**夏休みの綴方生活**　（暗示の意味にて文話）

文　遊び――かにつかみ　手傳――お勝手
仕事――田の草取り　旅行――名古屋
研究――夏の草花　家の人――お母さんの病氣
自然――大風　動物――猫
自分――病氣　行事――夏祭
社会――火事　日記――朝顔日記
手紙――先生へ

詩　詩集を作る　詩の日記

九月

▼**文章觀の確立**　（凡一時間）

要旨

心情の動きを中心として、しみ〴〵と書いた文が「よい文」であると同時に、他方に於ては、ある一つの事柄を積極的に研究して、はつきりと人にわかるやうに書いた文も亦「よい文」である。こゝでは後者を指導して、正しい文章觀を培ひたいと思ふ。

要項

一、この子が掃除に對して、如何によく心を働かせて研究してゐるかを、見出させる。

二、簡潔な、わかり易い表現もよく鑑賞させる。

三、併し、かゝる文はやゝもすると、自己を忘れた概念化、公式化に流れ易い。その点をよく注意して扱ひたい。

お掃除しらべ

一、はたきのかけ方

お掃除は、先ず一番先ははたきをかけるのです。まどぎわや、しようじについてゐるほこりを、はらつてきれいにするのです。はたきはぼうにいらないきれをしばりつけてあるので、しばりつけた先のぼうではらふとがらすがわれたり、しやうじがやぶれたりします。一番先のきれのついてゐる所でかるくはらふのです。家の人たちは、ぼろ〳〵のきれをとつておいて、はたき

を作ります。こんなお掃除の時にいりような物が、私たちの手で作れるのです。私ははたきの作り方がやすいので、自分で作つてお掃除の時に使ひます。

二、はき方

はたきをかけてから、ほこりが落ちてゐるのではくのがほうきのやくめです。すみからすみまではかないと、ほこりがいつまでもたまつてゐます。ことにおざしきのすみやつくえの下にたまります。着物のたもとやポケットによくたまる毛のやうなきたない物があります。あゝいふ物がすみの方にたまつてゐます。あれがつまりほこりです。

三、ふき方

はいてしまつたら、今度はおぞうきんでふくのです。いつぱい水をつけてしぼらないでふく人がありますが、板が早くくさります。かたくしぼつてきゆつ〳〵とふく人がよいのです。人の知らないすみまでふくのです。いろ〳〵な所をふく時に二回つゞけてふくといゝ。ふく時にすみの方をふいてそれからふき出す。

四、はこび方

いろ〳〵な物をはこぶ時あわてゝはこぶと、ひつくりかへつてこまるから、おちついて、ゆつくりはこぶといゝと思ひます。私たちの組では三年の時、あわてゝはこんですゞり石をわつて人にめいわくをかけた時は、何度もあやまりましたから、今度からはあわてないやうにいたしませう。はこぶには手で持つ所をしつかりにぎつて、そろ〳〵歩いておく所におきます。

五、つかつた水のすてる所

學校では、つかつた水のすてる所は、ろうかにほこりがたつので、つかつた水をまきます。雨がふる日にはまいてはいけないので、水やにすてに行きます。家の方でも學校の方でも、おなじにした方がいゝと思ひます。

六、どうぐをおく所

どうぐをおく所はなるべくすみの方の板のある所にくぎをうつて、そこにかけておく。ぞうきんははりがねをひいてそこにかけておくと早くかわきます。私たちは二年生のお方のおそうじですから、おそうじに行くとおぞうきんが窓の向がはに板がうちつけてあつて、そこにほしてあるのでまい日から〳〵にかわいてゐます。さう言うふうに、おく所はちやんと決めておかないとなくなります。

七、かへる時

學校でおそうじをやつてかへる時には、まどをしめて、まくをひいて、ちやんと戸じまりをしてかへる。このごろは、いろ

〳〵な物がなくなるのでこまります。だから戸じまりは、わすれないやうにいたしませう。朝鮮にゐた時に、學校の中にどろぼうがはいつて、物をとつていくやうなこともありました。私たちも大事なものがおいてある中にはいられては、それこそたいへんですから、戸じまりは、かへる時におそうじの人がしめませう。

十一月

▼自己の説明　（凡三時間）

要旨

自己を種々の方面から調べさせ、内省させて、説明的に記述させる。意識的な生活態度を培ふと共に、他面に於て、説明形態に慣れさせたい。

要項

一、自己を如何なる視角から見て書かうかといふ事が第一の問題である。一例を擧げると

（イ）私の体　（ロ）私のくせ　（ハ）私の勉強

二、各項目に就いてよく内省させると同時に、又、よく調べさせる。例へば「私の体」の調査方法としては、身體檢査表、出缺席表、先生、父母の言葉、運動會及体操の時間の成績、等。

三、記述の前に、ノートに控をさせて、それをもととして書かせる。

四、毎時間、一項目位宛記述させ、後で全部を綴り合はせる。かくて相當の力作を要求したい。

五、鑑賞は次の諸点に主眼を置きたい。

（イ）調査、内容の深淺、適否、及生活態度

（ロ）説明的表現の巧拙。

一、私の体

私の一年生の時に、女學校の所で岩佐といふおいしやさんに体を見てもらひました。まず一番はじめに口の中へぴか〳〵のものをいれなさつた。その時「げつ」と私はひとりでに言へて、のどがおかしなふうになりました。

私の今はだい分大きくなりました。着物が一年々々少しづゝみじかくなるので、おばあさんは、

「大きくなつたからもつとゆうことを聞かないかん。お母ちやんは大きくなるにつれて着物をつくらんならんで。」と言ひなさいます。私のねえちやんと私と二人ともおなじぐらゐだから、人が「ふた子かね。」と言ひなさるので、私はねえちやん何で大きくならんやろと思ひます。おばあさんはよく人に

「ゆき子はふとつてゐるので、みんなおんなじ物をつくらんならんで、ちつともおさがりはだめだから困ります。」と、お祭などに行くとちやんとかう言はれます。そこのおばあさんやおぢいさんは、

「ふた子のやうに見えるな、顔を見るとちよつと、こつちの子はあね様に見えるはね。」と言ひなさいます。

私はよくびようきで學校を休みます。休むと何だか學校のことがしんぱいでなりません。この間かつどうしやしんの時休みました。お母さんは、

「氣持が惡かつたら、あがつてこやいゝで、學校へ行きんさい。」と言ひなさつたが、えらくて氣持が惡くてとても歩けませんので休みました。皆學校からかへるとかつどうしゃしんのことを話し合ひましたから、私はくやしくても歩けなかつたからしかたがなかつた。又ある時は、あつくてふとんの中にねておれませんので、お母さんに、

「お母ちやんあつい〳〵。」と言つてゐました。

私は一年生から身長は十五・五センチ長くなりました。重さは四キログラムふえました。えい養は一年生から甲ばかりです。

二、私のくせ

私は弟や妹や姉ちやんと、よくけんかをします。私と姉ちやんと二人、おじいさんの所でねて毎朝さうじをして内へかへるのです。それを夏休みまへからづつとつゞけてゐます。それで一しよに行くと一人が戸をしめて一人がじようをかふのです。それが私が戸をしめると、姉ちやんが私にじようをかはせやうと思つて、そこにまつてゐてちよつともじようをかひません。それで私は又一しよにだまつて立つてゐます。すると私が

「はよしめんさい。」と言ふと、姉ちやんが、

「ゆつ子しめやいゝがい。」と言ひます。それで私が、

「ねえがしめる番やでしらんわい。」と言つて私が行くと、姉ちやんもついてきます。私はちよつともしめえへんと、姉ちやんがしめてきて、

「うん、どゆつ子。」と言つて来て、ぽんとはります。それがもとでだん〳〵大きくなつて、ほうきではつたり、まくらでぶつたりして、けんかをします。いつもおばあさんは、

「一つはつたら　一つかへす、そうゆうふうにまけんきだからいかん。負けときやそれだけとくをつむのだから。」と言はれます。

三、私の勉強

讀方はさうすきでありませんでした。それでもこのごろは大分すきになりました。山の秋や犬ころ競馬もすきです。氣持のいい山の秋、かはいい犬ころなどすきです。讀方は皆十点です。それ

でも力だめしがでると何だかおそろしいやうです。私は時々姉ちやんに

「力だめし8・5やつたは。」

「ふんとか、わつちは9か8・5やつたは。」

「見して。」

「まんだ學校にあるし点もまんだわからん。」さう言つて力だめしのことをよく話します。

算術は書くことはすきですけれどmやcmのことはさうすきではありません。算術は一生けんめいに書いてゐて、点を學校へ来て先生に讀んでもらつて合はせると、とんだ所でちがつてしまひます。書いてゐてよく見てやるけれど、ちがつてしまひます。

裁ほうはすきです。けれど組では、十点一人もありません。裁ほう室へ行くと氣持がよくなるやうです。お話があつても氣がすーつとして、はれ〴〵な心になります。今までざうきんを二枚作つたし、いろ〳〵つくりました。ズロースはまだ作りかけです。

一、ざうきん　二枚　　三、まくらとまくらおほい

二、べんとぶろしき　　四、ズロース

これだけ作りました。

書方はじようずに書ける時はすきですが、へたに書ける時はきらいです。昨日ごろは學校のてんらん會で書方をだすので、一生けんめいです。皆かへつてしまつた後、十二三人だけのこつて毎日やつてゐます。一人々々見てもらつて書いてゐます。先生が

「こゝらへんから書きなさい。」と言つて指でおしへてもらつて

「もつと〳〵おさへなさい。」と言ひなさる時は、一生けんめい力を出して書きます。

「じようずに書けた。」と言ひなさる時も、まんだ後のを書かんならんから、後のが惡いと又書きなほさんならんのでまだ〳〵一生けんめいで書きます。

「こゝをおさへるのがもつと強いとよかつた。」と言ひなさつた時などは、書きなほさんならんかしらんと思ひ、ひやあせが出さうです。

綴方はすきです。お祭などといふやうなだいで書くと、長くなると思つてどうしても書けません。優や優上などとるとうれしいです。詩は長く書けるやうになりました。私たちの組は皆優か美上までで、良やなんか一人か二人ぐらゐになりました。先生は、

「皆は優といふと、はいとうは喜こんでゐたが、このごろはさう喜ばんやうになつて、優上といふと喜ぶやうになつた。」とわらひながらさう言ひなさいます。

**▼自由作**　（凡二時間）

文の背景描寫を指導する。

二　月

▼批判的な文　（凡一時間）

要旨

周圍の事物に對して、幼稚ながらも批判的に眺めて行かうとする傾向がぼつ〳〵現はれ始める。適當な文例によつて、この傾向を觸發させ、取材、態度への暗示を考へたい。

要項

一、「自分の心で思つてゐること」を書くのも綴方では大切だと教へる。特に「あんな事はいけない」「あれはよい事だ」などと思つたことを、充分語らせ、表現させる。

二、正しき正義感、人生觀を育てるやう注意する。

へびを食ふ人

この間やながせでお父さんとみせもの小屋へはいつたら、土人がへびをなぶつてゐた。色の黒い、頭の毛のモジャ〳〵した目のきつい土人だつた。へびを首にまいたり、はちまきにしたりしてゐたが、そのうちにへびの頭を口の中へ入れて、ガキッとくひきつてしまつたので、ぼくはびつくりした。土人はへいきでへびのかはをむいて食べはじめた。ぼくは氣持がわるくてしかたがなかつた。見てゐる人はみんな顔をしかめて見てをつた。

小屋をでてから、ぼくはどうしてあんなイヤなものを見せるのだらうと思つた。又どうしてみんながあんなものを、お金を出して見にはいるんだらうとふしぎに思つた。お父さんにそう言ふと、「それはめずらしいからさ。」とおつしやつたが、ぼくはいくらめずらしいからといつて、あんな氣持のわるいものはやめた方がいゝと思ふ。（前附屬　）

三　月

▼自由作　（凡三時間）

▼作品の整理　（凡二時間）

要旨

一年間の作品を、記述年月日順に整理して、自己の文集を作成させる。自己の發展の路を反省すると共に、又級友の綴方生活をよく認識、理會させたい。

五

昭和十四年十二月、岐阜縣師範學校附屬小學校編著『實踐綴方教授細目（上巻）』が発刊され、次いで翌十五年七月、同じく『實踐綴方教授細目（下巻）』が発刊された。上、下巻合わせて六百五十頁に及ぶ大部な著作である。

附屬小主事の野島忠太郎が、この『實踐綴方教授細目』（以下

『實践細目』と略す）の「跋」の中で、「……編著は綴方部員の合同研究によったもので、特に研究主任岸訓導の努力が勞力の大部を占める。これ丈の勞作を纏め上げた同君始め部員の苦労を多とし……」と述べているように、『實践細目』の成立に、岸の力が大きくかかわっていたことが分かる。

岸にとっては、川口半平が転出でやり残しとなった仕事の後を継いで『新綴方系統案』をまとめてから四か年が経過していた。川口が『綴方指導細目』を著し、「学習としての綴方教育《綴方は如何なる路を歩むべきか》」（「岐阜縣教育」昭2・8）で綴方指導系統案の必要性を主張し、それらをまとめて『生活共感　綴方指導の新路』、『生活開発の綴方教育』、そして自分がかかわった『新綴方系統案』を相次いで刊行することで造りあげられてきた岐阜県師範学校附属小学校の綴方系統案についての流れを、実践からまとまってきた自分の考えと、これまでの附属の歩みをふまえて、このあたりで集大成してみたい、という思いが岸にはあったのではないかと推測される。そのことは、特にこの『実践細目』の構成、内容等について、これまでの綴方の教授細目にはなかった、特徴的なものが見られることからも推測できる。

（一）まず、冒頭に、綴方指導についての基本的な考え方、内容、方途等についての「論文」を載せていることである。おそらく岸の書き下ろしによるものであろう。

・上巻……「何のために綴方を指導するのか」（六ページ）

この中で岸が述べていることを要約してみると次のようになる。

「綴方教育は、第一のねらひとして、自分の思想・感情を、文章によって正しく相手に傳えることの出来る力を修練しなければならない。――正しい文章」

「綴方教育は、第二のねらひとして、自分の思想・感情を、文章にあらはしてたのしむ心を養ひたい。――ゆたかな文章」

・下巻……「綴方は如何にして指導するか」（十一ページ）

この中で岸が述べていることを要約してみると次のようになる。

「綴方を指導する場合、作品指導、基礎指導、機會指導の三つに分けて考える。基礎指導に於て短い文章を強く修練し、作品指導に於ては相當の長文を深く綴らせ、機會指導に於ては文を多く書くことを練習させる。

◎作品指導の要諦は、子供によく生活させてから書かせ、綴る段階（取材、構想・記述、推敲・清書、鑑賞・批評）を念入りに行っていくところにある。

◎基礎指導は作品に即して行はるべきものであるが、低學年では切離して指導した方が効果が多いやうに思はれるので本細目では尋三までは基礎指導そのものの系統を追つて排列した。基礎指導の内容は、記述形式、假名遣、漢字、複雑なことばの表記、文脈であり、その指導方法としては、聴寫、視寫、短文創作、共同批正、暗寫がある。基礎指導のねらう所は「徹底修練」である。

◎機會指導としては、学級経営とのかかわりで、生活日記、壁新聞、学級新聞、届書、学習ノート等が考えられる。

（二）四月から翌年三月までの各月の「綴方生活暦（岐阜市長良地方）」を載せている。上段が「この月の行事」、下段が「この月の綴方生活（参考文題）」の欄となっている。（五月の例）

| 月 | | |
|---|---|---|
| 五 | 端午の節句(五日) | ○お節句　しようぶ湯、鯉幟り、ちまき |
| | 鵜飼はじめ(一一日) | ○遠足　遠足を待つ、遠足の朝、金華山上より |
| | 父兄會 | ○鵜飼　鵜飼を見た、夜の長良川、うかか |
| | 楠公の戦死(三五日) | ○木の實、草の實　いちご狩り、さくらんぼ、筍の研究 |
| | 海軍記念日(二七日) | まゝごと、わらびとり |
| | 朗讀會 | ○蠶　蚕の生長、桑つみ、養蚕日記・ |
| | 公開授業 | ○稲作の用意　田打地、子もり、あぜぬり |

これは、単に飾り物的な一覧表として載せたというのでなく、各学年の毎月の「指導要項」の初めに「この月の自然・行事・遊び・仕事に親しませる。（隨時。巻末の生活暦を参照）」の項目を掲げ、常時、取材の指導に生かすようにすることが意図されている。

（三）各学年の扉のページ下段に、各月毎の綴方主題一覧表が示してある。例えば、尋六の場合は次のようである。

| 月 | | 月 | |
|---|---|---|---|
| 四 | 感想を書く | 十 | 旅行を書く |
| 月 | 自由選題 | 月 | 自由選題 |
| 五 | 童　詩 | 十一 | 仕事を書く |
| 月 | 自由選題 | 月 | 自由選題 |
| 六 | 動物を書く | 十二 | 手　紙 |
| 月 | 自由選題 | 月 | 自由選題 |
| 七 | 人物を書く | 一 | 生活日記 |
| 月 | 自由選題 | 月 | 自由選題 |
| 八 | 夏休日記 | 二 | 童　話 |
| 月 | | 月 | 自由選題 |
| 九 | 科学的に書く | 三 | 論　文 |
| 月 | 自由選題 | 月 | 自由選題 |

学年によって、月によって違いはあるが、大体低学年では月三主題、高学年で月二主題ぐらいの主題配当課題と自由選題とのバランスも考えられていることが分かる。

（四）各学年の綴方教授細目は、次のような構成でまとめられている。まず最初に、その学年一年間を見通した項目。

指導の方針
指導の力点
　取材、構想、表現、記述、推敲、鑑賞・批評の各項目ごとに

次いで各月ごとの項目。

（　）月
指導要項
綴方の主題
　要旨
　配当時間（全体時間数と、その中の一時間ごとの内容）
　教授上の注意
　参考文例

それぞれの項目に従って考えが述べられ、具体的な説明等が書かれている。

（五）「参考文例」の提示の仕方に工夫が見られる。ただ作品を載せるというのでなく、作品鑑賞の視点、書きぶりのよさ、問題点の指摘等、鑑賞指導の手がかりが、全参考文に注記されている。一例を、前記（三）で年間の主題一覧を例示した尋常六年生の、十一月「仕事を書く」の細目に載せてある参考文例の場合で見てみよう。

馬屋のこえ置き

「お晝すぎからこやなぎの田んぼへ來いよ。辨當を持ってなあ。」と、今朝お母さんがさう言って川へ行きなさった。私はまだ早いかと思ったが、まわしををしてをればお晝頃になってしまふからと思ってまわしをした。①小さいおひつに御飯を入れ、辨當箱におかずを入れ茶碗と箸を持って田へ行った。今朝おそくから馬をつれて田をすきに行きなさったのに、もう一反の田を八畝ほどすかれてゐる。②お母さんもお父さんも馬まで汗をながしてゐる。馬は首をかたげ足をのそ〳〵おくってゐる。お母さんは馬と足をそろへ、馬に白い息をかけられながら赤い顔をして、私の方を向き、「はる、辨當はそこのはさの所に置いとけ。」と言ひながら馬と一しよに行きなさる。お父さんは首をかたげ、足を片足すいた所へ入れ、すきを持って、「はいよ〳〵」と言ひながらすいて見える。私は辨當を

働くことによろこびを持ちこやしを両手で、ぎゅつと握つて父の手助けをする。作者の健康な生活ぶりには全く好感がもてる。土のあたゝかみをぢかに受けて生まれた作品だ。しかも、たゞせつせと働くのみでなく詩を作るやうな心のゆたかさを持ってゐる。父母もあたゝかい。作者が飯を食ふときにいたはる父と母のことばは、百姓のもつ太い愛撫の姿だ。働く綴方として代表的なものといふことがいへよう。

①この克明な書きぶりに、百姓の生活がうかゞへて面白い。

②父、母、馬、それ〴〵個性がよく書けてゐる。

はさのそばへ持つて行つた。はさには稻がかゝつてゐる。そして又見てゐた。次々にすかれてゆく赤黒茶の土が幅五十センチぐらい、深さ二十センチぐらいでぼこ〳〵おきる。

私は自分のはなとりの事を思ひ出した。私がはなとる時は中々のやうな氣がするが、ほんとに早くすける。馬もおとなしく行く。私がはさのそばへしやがみ、いなごをつかまへてゐると、お母さんがみえた。何をしにみえたのだらうと思つて田の方を見ると、もうすかれてゐた。ほんとに早いとつく〴〵思つた。お父さんは馬を家へ置きに行きなさつた。お母さんがはさごを打つてみえるとお父さんはすぐにみえた。兄さんは鉢巻をしてお母さんとかはつてはさごを打ちなさつた。お父さんも鉢巻をしてはさごを打ちなさつた。お母さんはうねの上を横に切りなさるので、私はその上をふんで行つた。③うねの切り方はたてに切るのと横に切るのがある。家ではあぜぎわとまくらは横で、その外はたてです。私がふんで行く幅は五、六センチぐらいです。たてのうねをふんでゆく時、あまりくろの方に切つてあると、こまかい土が落ちる時があいまにあります。それで私は少し中をふんで行く。だから大へんいがむ。するとお母さんが後を見て、「えがんでゐるなあ。まあ、綱を引いてうねを切ろか。」と言つて鍬を下に置いて縄を取りに行きなさつた。私は縄を引けばいがまんでいゝわと思つた。縄を引いてお母さんは切つて行きなさつた。私は次々とふんで行つた。はさごを打つてしまひなさつたお父さんと兄さんは、こちらへ來てはさのそばへ坐りなさつた。私は先よりも一生けんめいやつて、とう〳〵やつてしまつた。そしてお辨當を食べた。

私は田でお辨當を食べることが一番好きです。気持のよい空に、からすが三羽とんで行く。どこかで稻こきの音がいそがしさうに聞える。私はむしろの上に東向きに座つた。私の後にははさがある。私が首をちゞめてゐるのをお父さんが見て、「はる、寒いやろ、千本やぐらが短いから、下から風が來るでな。これが世界一なら

③この説明の態度はよい。

このあたりのあたゝかさはうらやましい。

下までとゞいてゐるでいゝけど。」と言ひなさつた。私は「ほんとに今の風はつめたいわ、着物の下へしみこんで來るがな。」と言つた。お母さんが御飯をよそつてくださつたので、私は食べ始めた。お母さんが「はる、たんと食べよ、じきに腹がへつてしまふで。」と言ひなさつた。私は「ほん。」と言つて又食べた。四五はい食べるともう腹いっぱいになつてどうしても食べられない。お父さんは食べてしまつて、又鉢巻をし、「はる、たんと食べなあかんぞ。」と私に言ひなさつた。私はもう食べられないのに又言ひなさつたので、「わつちや、まあ腹がふくれた。」と言つた。

私がふんで置いた後へお母さんがこえをかけなさる。そのこえの上へお母さんが麥をまきなさる。兄さんが馬屋のこえを一番下の田から、びくにいなつて持つて來て下さる。私は、お母さんの麥をまきなさつた後へ馬屋のこえをかぶせるといふやうな順に仕事を始めた。お父さんはじきにこえをかけてしまひなさつたので、兄

④實感そのまゝに、生きくと書いてある。

さんとかはりなさつた。④びくの中からはゆげのやうなのが出てゐる。ぎゆつとつかむと大へんぬくとい。これが寒い朝ならどんなにぬくいだらうかと思ひながら馬屋のこえを置いた。すると隣の田も田すきに見えた。私はどこでも田すきを始めやつせるなあと思つて立つた。空は大へん気持がよい。よく晴れて金華山もすぐそばに見える。私は詩を作つた。

馬屋のこえ置きに
こやなぎの田んぼへ行つた。
もうお父さんがびくでいなつて見える。
馬屋のこえから
ぼうつと白い湯氣が上る。
うでまくつて私はぎゆつとつかんだ。
あついさつまいもをにぎつたやうだ。
麥の上にかぶせては新しいこえを又つかむ。
手がうだつたやうに赤い。
さむい時だといゝがなあ。
顔を上げるとからすが二羽とんでいく。
となりの田では田すきのさい中、

馬がえらさうに首をかたげて、
足をのそ〳〵おくっている。
電信ぼうの針金にすゞめがとまって、
どれも顔を上へあげて鳴いてゐる。
あゝきれいな空だ。
明日も天氣だらう。

私は又馬屋のこえを置き始めた。すると兄さんが見えたので私が「馬屋のこえ置きの競爭をやらうかな。」と言ふと兄さんは、「よしやろかや。」と言ひながら又手ぬぐひをしめなほしなさった。私は兄さんに勝ってやらうと思って、「兄さま、わっちが一本でおまはんがまくら全部。」と言ふと「よし。」と言ひなさった。私のやる一本と言ふのは、十二、三米ぐらいのを一本で、兄さんは一つのうねの上に横に切ってあるのを全部です。うねの長さは六米ぐらい、幅一・五米ぐらいです。[5]兄さんは私の二倍ぐらいだから私の方が勝っでいゝわ、私がいくらおそいと言っても、兄さんの半分だから勝てるわと思って、兄さんの方を見ると、兄さんはうねに片足かけてすぐ出來るやうなふうをしてみえた。私もまわしをして片足うねにかけた。私が「一、二の三」と言ふとすぐびくのをつかんでまきなさった。私は一、二の三と言ってから、勝っでいゝわと思って少しの間兄さんのやってみえるのを見てゐた。見てゐる中に何本も〳〵すぐこえを置きなさる。私はちやっとやった。私が三分の二ぐらいやってしまった頃、兄さんが「やってしまった。」と言ひなさった。私は、どうしても兄さんは早いなあ、さっき見ておらしとすぐやりやよかった、やっぱりゆだんをすると負けるのだとつく〴〵思った。兄さんはやってしまったきり下の方へ馬屋のこえ置きに行ってしまひなさった。私なら勝った〳〵と言ってじまんするのにと思った。夕方まで働いてうちへ歸った。

⑤兄と競爭をしてやらうとたくらむ心もたのもしいが、特にこのセンテンスは如實に書けてゐて技術的にすばらしい。

『綴方細目（下）』の冒頭に載せられた「綴方は如何に指導するか」の中に述べられた取材、構想・記述、鑑賞・批評を、実際の作品を例にして、さらに具体化していこうとする試みである。岸のイメージの中には、「赤い鳥」の三重吉の「綴方選評」

があったであろうし、「鑑賞文選」の「綴方の研究」欄の構成があったのではないかと推測される。そして『新綴方系統案』で提示した「實際指導に活用出来る」系統案であることの一層の充実を図ったことが明らかである。

（六）『綴方指導の新路』、『新綴方系統案』との対比において、『実践綴方教授細目』は、参考文例の掲載数の増加、掲載作品の内容の充実は著しい。特に、自校児童の作品の全体に占める割合が極めて大きくなっているのは、指導の成果にある程度の自信が出てきていることを物語っているように思われる。

**岐阜県師範学校附属小学校**
**「綴方教授細目」の参考文例数の推移**

| 掲載学年 | 綴方指導の新路 | 新綴方系統案 | 實践綴方教授細目 |
|---|---|---|---|
| 1年生 | 14 | 20（10） | 28（ 2） |
| 2年生 | 20（5） | 26（18） | 39（ 1） |
| 3年生 | 13（1） | 23（ 4） | 40（ 4） |
| 4年生 | 12 | 19（ 3） | 38（ 4） |
| 5年生 | 12 | 18（ 9） | 33（ 4） |
| 6年生 | 10（1） | 22（12） | 36（ 1） |
| 計 | 81 | 128（56） | 214（16） |

（　）内の数字は他県、他校の綴方引用数

では、教授細目の具体的な内容を尋常六年生の場合で見てみたい。参考文例として載せられた作品が、いずれも長文になってきているので、細目の極一部分を紹介することしかできなかった。

**尋六の綴方**

指導の方針

綴方は、文を綴ることを修練して人間を形成する教科であるといはれてゐるが、かういふことを最もしみじみと感ずるのはこの學年になつてからである。子供達の眼は最早單なる生活行動の記録に止つてゐない。行動記録の背後には何かの感情があり思想があり、人間がある。綴方を讀みながら、自分自身の問題を考へるやうな身近い心持で、子供達の生き方をいろ〳〵と考へることが出来る。

要するに尋六になると人間的な感情が相當ゆたかに發達して、物事を観る眼が広く厚くなつて來るのであらう。この傾向が特に強くあらはれてゐのは本細目七月の「不幸な姉さん」である。作者は、不幸つゞきの姉の身の上を丹念に敍述して子供ながらに心配し同情してゐる。貧しい家に嫁いだ姉、夫の不慮の死、離縁、奉公、再縁、繼子の悩み等人生の重大問題がいくつも書列ねられ、あたかも一篇の小説の觀がある。しかも、それは第

三者として冷静に語られるのでなく、「もうこれで姉さんも安心だと思つた」の結びに至るまで、心からの作者の關心が寄せられてゐる。十枚に近い長文を、鉛筆の芯を刻みこむやうにして書いてきた努力に接すると、全く頭が下る。そしてかういふ廣く、深い人間的態度こそ尋六に於て第一にねらはなければならない点であると感ずるのである。

この人間的な感情のゆたかさは、思想的に深まつて感想文、評論文となって實を結ぶ。細目四月の「幹事」二月の「ひ鯉」三月の「學藝會の反省」「私の學用品」等がこの傾向のあらはれである。今、童話「ひ鯉」についてみても、尋五までの童話が、多くは事件的な構成や、實感的な表現に力を入れてゐるのに對し、こゝではテーマに中心が置かれてゐる。しかも、惡玉善玉の單純さから脱して人間的な複雑な感情を主としてゐる。注目すべき心の生長である。

この傾向が理知的に磨かれて、研究論文九月「蠶の出るまで」の如き文となり、意志的に強められて十一月「馬屋のこえ置き」等の文となる。すべて、どつしりと分厚く心に迫る力を持った作品である。

以上が尋六綴方の極めて概略的な様相であるが、その指導については、やはりこの傾向にもとづき、「生活を充實」させるところに重点を置くべきであらう。低學年では先ず自由に「明け放たせ」、中學年に於て横に廣く「開かせた」綴方は、高學年に至つて「深くみたす」ことを考へたい。勿論尋五に於ても深める点に主力を置いたのであるが、それはたゞかういふ新しい方向に手を染めたのみで、「みたす」ところまでは達しなかつたことゝ思ふ。取材、構想、記述、推敲、鑑賞、批評の各指導段階に於て、充分念入りに深く指導すべきである。

又他の見地から眺めると、この學年は申すまでもなく尋常科の最高學年であり、今暫くして社會に出て行く子供達である。國語科要旨の要求する「正確ニ思想ヲ表彰スル能ヲ養ヒ」の点については、充分に修練を積まなければならない。「みたす」といふことは、内容的に深めるのみでなく、形式の方面に於ても熟達させることが肝要である。

指導の力点

取材

素材に吟味を加へ、心によく熟したものを取り上げる態度を養ふ。

○自己の生活を眞劍に反省する態度

○家とか社會とか、一歩高い見地から眺める態度

○物事に對して思想的に評論する態度

○物事に對して意欲的に、又理智的に考究する態度

構想

書かうとする「めあて」をはつきりと立て、その目標の下に素材を適當に配する、所謂思想的構想を指導する。

表現

各種の表現技法が、必要に應じて充分活用出來るやうに修練する。

○文の中へ詩を挿入すること

○心理描寫と情景描寫を適當に織り交ぜること

○文の内容によつてセンテンスの長短を加減すること

○實證を挙げながら論理を展開すること

記述

記述形式については完全に熟達してゐなければならない。

○地の文は標準語で

○國語假名遣・送り假名・漢字等に誤りのないこと

○句讀点・カギ・段落等は完全に

文字は丁寧に、しかもある速度をもつて書く修練も行ひたい。

推敲

内容・形式共に誤りがないと思ふまで、何回でも吟味する態度を養ふ。

鑑賞・批評

○よく働いてゐることばに着眼させること

○作者の生き方について、深く考究すること

## 四　月

指導要項

○この月の自然・行事・遊び・仕事に親しませる。（隨時。巻末の生活暦を参照）

○新學年の感想を綴らせることにより生活を反省する態度を養ふ。（凡五時間）

○好きな題材によつて力一ぱい綴らせ、綴る力の伸展をはかる。（凡三時間）

○學級の共通缺陷と思はれる点をとり出して、基礎修練を行ふ。（隨時）

感想を書く

要旨

新學年の感想を綴らせることにより、生活を深く反省し、自己の意見を明確に述べる態度を養ふ。

時間配当　凡五時間

一時　取材

二時　構想・記述

三時　推敲
四時　清書
五時　鑑賞・批評

教授上の注意

○この學年の四月は、今までの四月よりももつと緊張した心持で迎へることゝ思ふ。尋常科の最終學年であるとの感じが切實に迫つて來ることゝ、又、かういふ感慨が、やうやくゆたかに感受出來る心の深まりが出來たことゝによるのであらう。この新鮮な緊張した心持を、素直に綴らせたいと思ふ。

○自分の經驗や、見聞した事柄をありのまゝに記録することは、そんなに抵抗を感じない。しかし、感想を書くとか、意見を述べるいふやうな論文めいたものを書くことは、子供にとつて苦手である。が、この學年の頃になれば、かういふ方面も、相當修練する必要がある。

○論文の生命は、言はうとすることが、はつきりと順序正しく書けてゐることである。隨つて構想の指導を特に念入りに行ひ、段落を論理的に整序することが大切である。又、文脈の正しさについても、意識的に指導することが肝要であらう。

○この種の文の陷り易い点は、抽象的に流れて極めて通り一片の文となり、何の個性味も迫力もなくなることである。隨つて、一つの立論に對しては常に實證的な基礎を持つことが大切となる。「僕はこんな癖がある」と述べたゞけでなくてその例を擧げ、又「これから大いに勉強しよう」といふのみにとどめなくて、その勉強プランを具体的にに書くといふ様に綴らせたい。

参考文例　注・先に示した「馬屋のこえ置き」の場合のように、この『教授細目』は、「参考文例」の提示はすべて、上段に注記がされている。この「六年生になつて」も、書き始めの部分に一か所だけ、次のような注記がされている。

「筆の達者な子供である。縦横に自分の感じをのべてゐる。渋滞したところがない。特に、第一段は六年になつた時の心持がリアルに書けてゐる。全体的に眺めて、やゝ個人的な感想が多く、新しいお友達、學級の様子、新しい教科書、下級生への感想等が書けてゐない。女學校入學が作者に強くひゞいてゐるのであらう。」

以下『教授細目』の参考文例の提示は、スペースの関係もあって、綴方本文だけの提示に留

める。

## 六年生になつて

六年になつた。小さい時、私も早く六年になつてみたい、あゝいふ大きい子になつてみたいと思つてゐたが、じぶんが六年になつてみると、一かう平氣なものだ。昔の六年生はもつと大きかつたやうな氣がする。お清書の名前に、ついうつかりして尋五と書いて、あゝ私は尋六だつたと後で氣付く。お母さんが私が仕事をするそばで「六年になつたんやから、もつとしつかりしないかん。」と言はれると、へんな氣持がする。

お父さんが「お父さんが病氣にかゝらなかつたら、お前も女學校へ入れてやる。」と言はれたので、今年は一生けんめいに勉強しなければならない。うれしい氣がするが、それでももしすべつたらと思ふと、ほんたうに恥づかしいやうな恐しいやうな氣がする。去年すべつた○○さんは、泣いてばかりみえて、おうちも引越してしまひなさつた。私もあゝいふふうにすべつたら大變だ。この間の日曜日に公園へ寫生をしに行つたら、制服を着たおおぜいの女學生が、きやつ〳〵笑ひながらお辨當を食べてゐた。私はうらやましかつた。

五年生の時は、勉強よりも遊ぶことが一生けんめいであつた。宿題があるとそれだけ勉強をするが、ないと遊んでしまふ。夕飯を食べてから、勉強間へ行くのがなか〳〵おつくうだ。お姉さんが「幸子、勉強しんの。」と言はれても「するわ。」と小さい聲でいふだけで、なか〳〵机に向かへない。今月からは、こんなことはきつとやめて、一心に勉強しよう。そのために私は次の二つのことを守らうと決心した。

一、宿題はあつてもなかつても、毎日一時間半は必ず勉強する。

二、「力だめし」をもらつたら、その点數をグラフにつける。

この二つは、試驗休みに伊奈波様へおまゐりした時、神様におちかひをした。

お行儀の方も直すことがたくさんある。その中で一番いけないのは言葉づかひです。「私」といふことを「わたい」と言つたり、眞福寺の子たちのがうつつて「わつち」と言つたりする。それから、何か氣にくはないと「どそんやなあ」と言ふくせがある。先生が「あんた達は、まるで土方のやうなことばを使ふね。」と言はれたことがある。私はこれから、美しいことばに直さうと思ふ。

体は丈夫だからうれしい。けれども少し太つてゐるのが情ない。お姉さんは、でぶちやんと言つてひやかすが、私はでぶちやんではない。この間風呂に入る時お母さんが「幸ちやんはで

ぶちやんやと言ふけど、そう太つてゐないね。」と言はれたのでうれしかつた。これからは太るよりも強くなりたい。

先生は三年生からの岸先生です。私達のことを何もかも知つてゐられるし、私達も先生には何でもお話出來るので安心です。

一昨日掃除がすんで教室の中で遊んでゐると、先生が見えて「あんた達も大きなつたな。もう鼻もたらかしてゐないし。」と言はれたのでおもしろかつた。「わたしも先生がこの學校へ見えた時知つてゐるわ。」と清水さんが言ひなさつた。教室は二階になつたので明かるくて見晴しがよい。勉強してゐながら金華山が見える。

## 七　月

指導要項

○この月の自然・行事・遊び・仕事に親しませる。（隨時。巻末の生活暦を参照）

○人物の生活を主題として文を綴らせることにより、人生をゆたかに觀る態度を養ふ。（凡五時間）

○自由選題によつて力一ぱい綴らせ、綴る力の伸展をはかる。（凡三時間）

○學級の共通缺点と思はれる点をとり出して基礎修練を行ふ。（隨時）

### 人物を描く

要旨

人物の生活を深く広く掘り下げて書くことにより、人生をゆたかに觀る態度を養ふ。

時間配当　凡五時間

一時　取材
二時　構想・記述
三時　推敲
四時　清書
五時　鑑賞・批評

教授上の注意

○人物を對象として綴方を書くことは、低學年からしば〳〵指導して來たところである。しかし低學年では斷片的な印象の記述に止り、中學年では、生活を書くとはいふものゝ、その人の性質、職業等を平面的に敍述するのが大部分であつた。こゝでは、ある人物を中心として、その生活を過去にまで溯り、深く広く掘り下げることに主力を置きたい。

○かういふ綴方は、書く事により、又人の文を鑑賞することにより、人生の生き方をいろ〳〵と教へられるものである。教科書から離れて、現實の社會をのぞいて見るのもこの頃と

しては必要なことゝ思ふ。

○隨つて、相當長期にわたる經過を書かせたい。「或る日の姉さん」や「或る事件の姉さん」でなく、「姉さん」自身を克明に書き綴らせたい。構想の指導も重要になると思ふし、要を得て印象的に描寫する技術も必要になつて來る。

○しかし、かういふ深刻な文は指導によつては、徒に現實暴露をもつて得々とする子供を作つたり、早熟な大人のやうな子供を作つたりする危險性がある。どこまでも眞實な心持で文を綴らせ、又、社會に對する子供の眼には細心の注意をはらひ、明かるくゆたかに導くことが大切である。

参考文例　注・この作品上段に書かれている注記は次のようである。

この文は、中央公論社募集の全國綴方展に特選の首席を占めた。子供のひたむきな姉への愛情が、こゝまで深く厚く掘り下げたのである。この文を讀むと、子供は「天國の子だ」とか「夢の子」だとかの甘さは、一片の空言だといふことをしみ〴〵思ふ。現代の子供には、これくらゐひし〳〵と生活がおおひかむり、又自覺されてゐるのである。

この文の魅力が小説的な素材の變化に富んでゐる点にあることも爭はれない事實である。子供の眞實と、素材の面白さと、がつしりした表現技術と相俟つてこの力作が生まれたのである。

しかし、姉一家の生活があまりにも赤裸々に出てゐるので、この作品を取扱ふ態度はよほど慎重を要すると思ふ。

①②この印象描寫は要を得てゐる。美しい。

③この描寫も、簡単なことばの中に、その情景をよくあらはしてゐる。

④百姓屋の生活が出てゐる。

⑤しみ入るやうな書きぶりである。

⑥このことばに、姉への眞心が大きく息をしてゐる。

不幸な姉さん

姉さん（おばあさんの子、お母さんの妹）は、七年前くらいの時、いろ〳〵とおよめ入りの相談をしなさつた。その時私は六つであつた。①行きなさる時、私は姉さんが髪をゆつてもらつてゐる間、ついてばかりゐた。

行きなさつた所は、高富の「どうばし」です。それから毎日そこで菓子屋をして暮してゐられた。私も姉さんの家へ遊びに行つたことがあつた。②そして、たらひに水をくんでべつかうの鯛や蛙を浮かべて遊んでゐた。

ところが姉さんの所のおつさまは、あまり賢くなかつた。例へば、或人がお菓子を買ひにみえても、おつさまが出て來て賣つてやりなさると、間違つてしまひなさる。それでお客が少しも來なくなつたので、お菓子屋をおきなさることになつた。おつさまの家は小さなところで、何もなくきたない所でした。裏には少しの畠があつて、野菜などが作つてあつた。お菓子屋といつても、ものをにるかまが二つと、お菓子を作る「かた」が少しあるだけだ。お菓子もがん〳〵に入れて積んであるだけで、美しい入れ物もなく、かんばんもなく、外から見ると何屋かわからない。よくあんな家へ行きなさつたと後から思つた。けれども姉さんはしんぼうしてゐられた。お菓子屋は二年ぐらいでやめられた。

それからおつさまは、岐阜のたまり屋へ、たまり職人となつて行きなさることになつた。毎日、自轉車に乘つて行きなさる。姉さんは、毎日おべんたうをたいてやりなさつた。うちの人や私は「よい所へ行きなさつた。」と言つてゐた。

或日、おつさまは運悪く、天氣のよいのに長靴をはいてたまり屋へ行きなさつた。そしていつものやうにたまりをにてゐられた。たまり屋のくどはをかしくて地下室のやうになつてゐる。くどが土の中にあるので、ちようどかまのふちと土と同じ高さにある。そのかまはいくつもあり、非常に大きかつた。おつさまは、大きい「さいばし」のやうなもので、かきまはしてゐられた。とたんに、長靴が土からすべつて、かまの中へどぶんと落ちなさつた。たまりはにえ立つてゐたから大變です。早く出ることが出來なかつたので、体全体、大やけどをしなさつた。おつさまはおぼえなしになつて、病院へつれて行かれた。そのはまりなさつたかまは、もう使へないといふことであつた。

このことを聞いた姉さんは、非常に泣きなさつて一生けんめいたまり屋へ走り、それから小坂病院へ又走りなさつた。このことは、みな後から聞いたことで、私の家では何も知らなかつた。

一日たつと何かのうはさで、おつさまが入院したと聞えて來たので、家中びつくりした。氣の毒に、おばあさんは秀夫ちやを連れながら、泣いて泣いて泣きからかいて、目は赤くなつてゐた。みな、あれやこれやと言つてゐる。そのうちに、おぢいさんが行つて來ることになつて家を出なさつた。私も行きたかつたが行けなかつたので、おぢいさんが歸るのをまつてゐた。おつさまの熱は、ます〳〵高くなり四十度をこえた。姉さんは、何もせず泣いてゐるばかりだつた。[3]醫者がも

ういかんと言ひなさると、姉さんは餘計大きな聲で泣きなさる。体は包帯だらけで、体の色の見えるのは、顔ぐらい。かういつて歸つて來たおぢいさんが話なさると、おばあさんはます〳〵泣きなさつた。

その翌日おつさまはとう〳〵死になさつた。もう姉さんと子供と二人だけだ。姉さんの心はどうだらう。私がもしさうなつたらと思ひ、涙が出て仕方がなかつた。

おつさまが死になさつてから、家中が何となくさわがしい。後に残つた姉さんとその子供のしげちやんとをどうするかといふことです。いろ〳〵相談をしなさつて、姉さんがいよ〳〵私の家へもどりなさることになつた。私は、しげちやんを連れて見えるといゝなあ、遊べるし、又連れてやれるでと思つてゐた。しばらくして姉さんはもどつてみえたが、しげちやん來なかつた。しげちやんのいろ〳〵のものを本屋へやつて、しげちやんも本屋へやつてしまつたのです。私の家には、姉さんのたんす、長持などと大變な荷物が來た。[4]家は、蠶を飼はねばならぬし、置く所がない。いろ〳〵相談をしなさつて、座敷の床の間へ置きなさつた。これで何もかもすんだと思つたが、「どうばし」の姉さんの籍があれやこれやとむずかしい。家は蠶でせわしい。ほんたうにごた〳〵した日が長くつゞいた。

少したつて秋の時のこと、姉さんは岐阜の三輪といふおはり屋へ奉公に行きなさることになつた。姉さんがむかふの家へ行くと「上女中がよいか、下女中がよいか。」と聞きなさつた。上女中とふのは、お客様があつた時にもてなしたり、おはり屋の人のもてなしをする役です。下女中はお勝手をしたり、そうじをしたりするのです。姉さんは下女中になりなさつた。

一月くらゐたつて、姉さんの所から葉書が來た。着物を持つて來てくれと書いてあつた。蠶で床の間に棚が作つてあるので、着物をたんすから出すのが大變でした。それにせわしくてせわしくて、そんな所ではない。それでも、お母さんが持つて行つてやりなさつた。姉さんは、それから一ぺんも家へみえなくて、たゞお正月にだけ遊びに來られた。家へ來ると、むかふの家でえらかつたのか、寢てばかりみえて遊びなさらない。夜になつてから、おはり屋の家の様子を話してもらつたりした。

その中に、よその人が、およめさんにくださいと言つて來るやうになつた。ある時お母さんが用事があつて長良のおばさまの所へ行くと「となりにほしいと言ひなさる。」といふ

話があつた。その家は、およめさんが死になさつて三人ぐらしだつた。子供は二人あるが一人はどこかへあづけなさつて、後の子をおぢいさんがみえて、連れてゐられるのだつた。男の人の職業は刑務所の看守ださうだ。お母さんが家へ來てこのことを話すと、お父さんが「そんな所んたあかん。」と言ふ。「あんな家が惡うては、行く所がなくなつてしまふ。」とお母さんは言ふ。その頃は、この話の相談で十二時までも續いた。そして、とうとう姉さんはそこへ行きなさることになつた。

およめ入りは五月十九日だつた。二へん目であるからお客様は、おばさまと本屋のおつさまだけだつた。私が學校から歸ると、家が美しくなつてゐて、長持がならべてあつた。姉さんはおばさまの家から行きなさる。家では少しお菓子をくばりなさつた。私は姉さんがどんなふうをしておよめ入りをしなさつたか知りたくて仕方がなかつた。およめ入りがすんでから三日くらゐたつたある日、私が學校から歸つて來ると、姉さんが小さい女の子を連れてみえた。用事に來たとみえて、歸りに何かふろしきに包んで持つて行かれた。[5]ある朝のことである。私が朝禮で並んでゐると、新しい姉さんの子は、だれか知らん子といっしょに遊んでゐた。あゝ、やつぱりあの子やなあと私は思つて見てゐた。

もうこれで安氣になつたかといふと、まだである。「どうばし」のしげちやんがかはいさうです。ある日、おぢいちやんがしげちやんの所へ行きなさつて、「しげちやん、お母さんはどこへ行きなさつた?」と聞くと、しげちやんは、「お父さんもお母さんもお墓。」と言つたさうだ。私はかはいさうでならない。姉さんも、しげちやんをかはいがつてをられたのに、ほんたうにかはいさうだ。

この間蠶でせわしい盛りに、姉さんが小さい子を連れて家へ來られた。岬といふ名前の子です。とてもおうちやくで、御飯の時などぷん〳〵におこつて、姉さんは困つてゐられた。夜になつて、岬ちやんのお父さんが見えて、姉さんのことについて話をしなさつた。[6]もうこれで姉さんも安氣になつたと思つた。

## 十一月

指導要項

○この月の自然・行事・遊び・仕事に親しませる。（隨時。巻末の生活暦を参照）

○仕事の文を指導して強い生活意欲を養ふ。（凡五時間）

○自由選題により力一ぱい綴らせ、綴る力の伸展をはかる。

（凡三時間）

○學級の共通缺陷と思はれる点をとり出して基礎修練を行ふ。

（隨時）

仕事を書く

要旨

稲の取入れを中心とする秋の仕事を書かせることにより、表現をゆたかに修練すると共に、強い生活態度を養ふ。

時間配当　凡五時間

一時　取材
二時　構想・記述
三時　推敲
四時　清書
五時　鑑賞・批評

教授上の注意

○文學は鑑賞的な態度を根本とするところから、綴方もその影響をうけて、小さい子供の中から受容的静的な文を書かせる傾がないでもない。静かなゆたかな鑑賞力も大切だが、その反面に、自ら積極的に行動した強い体験も必要である。むしろかうした傾向こそ、小學校綴方の主流をなすものであると思ふ。

○かういふ意味で、秋の収穫を中心とする働きの生活は、得難い綴方的体験を提供する。こゝでは家族そろつて、和やかに語らひつゝ働く團欒のたのしさがある。大自然とぢかに親しみ、その中に浸りきる美しさがある。苦しさに耐えて仕事をする強さと、この辛さを忍びとほした後のよろこびがある。たのしさ、親しさ、苦しさ、よろこび等のさまゞの感情が一枚の田の中に醸し出されるのである。隨つて、働きの綴方のねらふ所は、單に働きの様子をくはしく描寫することでなく、働きをとほして感じられるこれ等の生活感情を再現させることにある。

○表現技術としては、目による描寫に終始することなく、耳も手も体も心も、すべてを充分に働かせて、把握し描寫するやうに指導したい。目によって情景を描寫し、話聲をうつすことによって人物を浮上らせ、手、足、体の感觸から來る具体的感覺によって迫眞力をもたせ、心持を書くことによって文を立体化する――要するに、汗を出して働くその姿のまゝが文章にもにじみ出るやうに指導したい。

○「勞働の綴方」が、ある種のイデオロギーから要求せられた時代があつた。この種の綴方は、やゝもすれば勞働そのものを神聖化し、理屈つぽいものとした觀がある。働きの

中には、子供らしい惡戯もあれば笑ひもあるし、無論素朴な真面目さもある。イデオロギーから綴方を指導することは、われ〳〵のとらない所である。

○指導語の一例

「手や足や体で感じたことを書け。」

「働くときの心持を、文にあらはせ。」

「仕事のやり方、順序も分るやうに書け。」

「家といふ立場からも仕事を眺めよ。」

参考文例

注・ここに載せられた作品の一つが、三十三頁に紹介した「馬屋のこえ置き」である。

## 六

『実践綴方教授細目（下巻）』が発刊された翌昭和十六年四月からは、それまでの小学校制度が廃止され、国民学校制度が実施されることになった。綴方は、国民科国語の中に位置づけられた。加えて、同年十二月八日からは太平洋戦争が始まり、日本は第二次世界大戦の大きな渦の中で、戦時色一色の日々が続くことになった。そういう状況の中では、綴方指導もおのずと、それまでとは違う対応を迫られることになって行った。

川口半平がまず手がけ、岸武雄に引き継がれ、十数年かけてまとめ上げられていった岐阜師範附属小学校の『実践綴方教授細目』は、岐阜県における戦前の綴方教育の実践を集約して生み出された、全国的に見ても誇り得る大きな財産であったと考える。しかし、太平洋戦争、そして敗戦、戦後の混乱は、こうした先人の創り出して来た業績、成果を、戦後の特に作文教育に引き継ぎ、さらに発展させて行くことを不可能にしたのである。

参考文献


◇『生活共感　綴方指導の新路』　川口半平　寶文館　昭和5年6月

◇「生活開発の綴方教育』　川口半平　厚生閣　昭和8年1月

◇「各教科の新研究』　岐阜縣師範學校附属小學校　昭和9年3月

◇「新綴方系統案』　岐阜縣師範學校附属小學校　大衆書房　昭和11年2月

◇「實践綴方教授細目（上巻）』　岐阜縣師範學校附属小學校　ミツビシヤ書店　昭和14年12月

◇『實践綴方教授細目（下巻）』　岐阜縣師範學校附属小學校　ミツビシヤ書店　昭和15年7月
◇『作文教育変遷史』　川口半平　岐阜県国語教育研究会　昭和33年10月
◇『綴方讀本』　鈴木三重吉　養徳社　昭和23年12月
◇『花ぐるみ』　川口半平　母と子ども社　昭和49年8月
◇『戦争のはざまに生きて』　岸　武雄　丸善名古屋出版サービスセンター　1999年6月
◇「岐阜縣教育」　岐阜県教育会・編　昭和2年　8月号
◇「綴方岐阜人」第2号　綴方岐阜人聯盟・編　昭和12年5月
◇「教育岐阜人」第3号　教育岐阜人聯盟・編　昭和13年7月
◇「赤い鳥」　赤い鳥社　昭和6年　1月号